



トラック 3 姉妹・ ダンプ姉ちゃん理絵



2020 年男の職場から男
が消えて、女性が進出する

音川伊奈利

東京オリンピックの1年前の2019年7月夏の真っ盛りの工事現場、この現場は京都市営競技場の新設工事で約30業種の業者が一次下請けで参加している。現場監督は30名で男女比は約7対3で女性が10名となっている、これはこの現場に限らず大手のゼネコンも地元の中小建設会社も女性の監督が増えている。

そしてこの比率はガードマン、重機のオペレーター、作業員も同じになる。オリンピックが東京で開催されると決まった5年ほど前とは比べ物にならないほど建設会社に限らず元々男の職場という産業に女性が進出していた。男の職場の代表でもあった建設、土木、運送業の現場、職場では男と女もトイレは同じ、更衣室、休憩室も同じことが17年の国会で問題になりこれらの現場でも男女別に設置されていた。

その工事現場に1台の大型ダンプカーが砂利を満載して入ってきた。運転しているのはこの現場のアイドル的存在の「理絵」で40歳、2人の子供の母親でもある。この理絵ちゃん、ダンプの運転手になってもう10年にもなる、当時は京都市内に女性大型ダンプの運転手は南区に2人、左京区に1人ぐらいしかいなかった。それが今では100名を超えているから30倍にはなる。しかし、これは大型ダンプのみで他の大型ミキサーカー、大型トラック、市バス、観光バスまで入れると軽く500名の女性が大型運転手として働いていることになる。

元々、これらの職業に就いていたのは戦後の団塊の世代の男達でこの東京オリンピックの前のこの年では年齢も70才を超えてほとんどがリタイアしていた。そこで人手不足から女性を雇用して養成してきた。昔のこのトラック運転手というのは荷物を積むのも降ろすのは手作業でかなりの重労働だったからこそ男の職場になったが、今やトラックで手降ろし作業などはまったくといっていいほどなくすべて機械化されている。もちろんダンプカー、ミキサーカー、各種バスの運転も男女の差はない、そしてラッキーなことに賃金までも男女差はなく女性でも働ければ男並みの賃金がもらえ子供が育てられるのです。

この理絵ちゃん、ダンプカーに乗ったきっかけというのもこの賃金のことです。当時のスーパーのパートでレジ係りをしていたが、時給は750円だった。これではたとえ月に150時間働いても生活保護者よりも少なかった。そんなときに聞いた話では日雇いのトラック運転手でも日当8000～18000円になるという。そのころ理絵は普通免許しかなかったが、大型トラックの免許を取得しようと決意していた。

理絵の両親はまったく普通のサラリーマンで親戚関係に建設や運輸関係者はいない。したがって理絵が大型免許を取ってダンプに乗るなんてことは想定外と反対している。そのころ理絵はまだ30才、両親は再婚を勧めていたが、理絵はもうこりごりと自立の道を選んでいた。理絵はと

りあえずは小さなトラックを経験しようとハローワークで小型、中型運転手の募集を見つけては面接に行っていたが、まだ当時は不景気で経験がないと雇わない会社ばかりだった。そんな折、無料の求人紙に4トンダンプ、日当8000円という建設会社があり応募していた。会社といっても木造のアパートの一室に田中建設という看板があるだけで社長も3台しかない小型ダンプの1台を運転していた。

理絵はその社長に、

「社長さん、採用ありがとうございます」

「社長ね～みんな田中ちゃといっているから田中ちゃんでもいいよ...それより俺のところは健康保険もないし、ボーナスもない、残業代でない、これはけっこう現場の都合で早く終わることが多いからチャラになる。日当8000円は日払いでもいいし、月末でもいい」

「はい、それでけっこうです。なにせ大型免許を取るための勉強ですから...」

「ああ～それね、今の現場は下水処理場の工事で広場があるから、誰かの大型ダンプを借りて俺が教えてやるよ～いやいや、それより理絵さんはそんなに綺麗だから、誰れでも教えてくれるよ～」

「そんなもんですか？」

「まあ～ガラの悪い連中だが、一旦、仲間に入れば義理と人情の世界だから...それに大型免許を取れば京都で一番いい会社を俺が紹介してやる」

こうして理絵は田中に4トンダンプの運転とダンプ操作の仕方をたった1日で教えてもらい次の日から4トンダンプカードライバーデビューしていた。仕事は朝は現場に8時と早いけど夕方は4～6時には終わっていた。田中建設は総勢3名だが、現場では同じ工事をしているという仲間意識で一つになっている。つまり、ここでは所属はどこであれこの工事現場の仲間になる。この当時は建設現場に女性は数名のガードマンと設計事務所の事務員ぐらいだった。

[音川伊奈利のブログ～その1](#)

[音川伊奈利のブログ～その2](#)

理絵のダンプは残土や産業廃棄物を積んでその中間施設まで運ぶのだが、公共工事のために4トンダンプに5トンも6トンも積まない。回数も午前4回、昼から3回ぐらいで昼休みもゆっくり取れるが、なにせ男の職場でトイレや休憩所などは理絵が経験したことがないほどの汚なさだった。やがて一ヶ月が経ち理絵は田中社長から25日分の給料として20万円をもらっていた。

このころさすがに色の白い理絵の顔も少し荒れてきた。そこで日焼けのために少し厚化粧をしたが、それがよかったのか若いダンプの運転手から重機のオペレーターまでが昼休みや夕方に運転を教えるという申し入れが殺到していた。理絵はそれに素直に従って練習をしていた。もちろん運転技術だけでなく学科までも真剣に教えてくれる。そしてみんなの意見で自動車教習場には行かないで直接京都府自動車試験場で試験を受けることになった。これはなかなか難しいが、なにせ費用は数千円で済むからだ、理絵は1回で学科試験をパスしている。その後、実地試験は3回落ちて、4回目で受かっているからこれでも早い方だという。

理絵は試験に受かったことをケータイで田中社長に報告をすると田中はダンプの無線でその旨をダンプ仲間に報告すると京都中はもちろん滋賀、大阪、奈良のダンプ仲間から祝福の無線が乱舞していた。そして、この日から関西で一番若くて一番綺麗なダンプネーチャン理絵としてスター的存在になっていた。まだ田中社長に拾われて半年だったがお別れした。それがまた不思議なことでその3歳下の妹の絵里奈がこれまた理絵と同様に夫とうまくいかず離婚をしていた。その絵里奈が今度は田中社長に拾われて姉同様に大型免許を取るために4トンダンプの修行を受けていた。

理絵は高校を卒業して信用金庫に就職していた。二十歳のときに友人の紹介で知り合った永沢健二と付き合っていた。健二は理絵の勤めていた京洛信用金庫西大路支店の近くの和菓子製造業の営業をしていたが、その会社が倒産したのは2009年の5月で理絵と結婚の予定だったが健二の次の就職が決まるまで延期になっていた。これがいわゆるリーマンショックで京都市内でも中小の企業が次々倒産している。

理絵も銀行に勤めていたからこの不況の深刻さが分かっているから健二の失業にはそんなにショックはなかった。そして健二も連日ハローワークに通い就職活動をしていたが、紹介されるのは期間を定めた地方の工場しかなかった。そうこうしているうちに派遣業というのが雨後のたけのこのように次々できてきた。そして健二も派遣社員として電気関係の会社に就職していたが、賃金については手取り約17万円ぐらいにしかなかった。一方の理絵の方は就職して4年目で賃金もボーナスを入れると20万円を超えていた。

そして理絵23才、健二25才の春に結婚していた。ところが結婚してすぐに理絵が妊娠して会社を辞めることになったが、夫婦の仲はよく続けて長男、長女を授かっていた。そのころから健二はより収入がいい夜勤の勤務に変更していたが、派遣社員の賃金では到底生活はやってはいけず2人の子供を保育所に預けて理絵もスーパーのレジ係りとして働いていた。

ところがあんなに優しくった健二も仕事のグチを理絵にぶつけるようになってきた。健二は、「社員と同じ仕事をしているのに社員の給料は俺らの倍ほどある、それに俺らのことを名前を呼ばず、おいその派遣、あの派遣を呼んで来い！まったく...我ら派遣をなめとる...」

これが1回や2回なら理絵も健二の気持ちがわかるが、理絵にすれば朝は子供の世話、そして保育園に送り、昼はパート、掃除洗濯料理、夕方は子供を保育園に迎えに行かねばならない、そんな健二のグチなど聞く暇もなかった。

一方の健二は夜勤が終わって仲間たちと早朝食堂で酒を飲むのが習慣になっていた。この仲間たちというのは同じ会社の派遣社員やまた別の夜勤の派遣社員らで派遣先の正社員の悪口や待遇への不満をそれぞれグチっていた。これらの飲み会というのはクセになり、金があろうがなかろうが毎日の日課になる。また店の方も上客なのでこれらの派遣社員の誕生日などには店の経営者のママが誕生日プレゼントを用意してくれた。そしてママの好意として派遣社員にはつけも許していた。

なんぼ安い食堂でもビールを2本、それに焼酎を1杯飲んで飯を食えば2000円はかかる、それだけで月々5万円になる。ところがそういう店には必ず高利の金融屋が出入りしているもので健二もそれに手をだしていた。朝の飲み食いはつけで月末には約5万円ほど食堂に支払わなければならない、健二の小遣いは5万円と収入の割には多いが、理絵も夜勤という過酷な労働に朝の食堂での酒を許していた。

そして給料の中から小遣いをもらうが、それはすべて食堂のつけに支払う。それに金融屋に2万円を返さなければならないが、それでは煙草銭にも困りまたその2万円を借りていた。健二は酒に酔って帰ってきて寝て、その夜は仕事のために家事どころか子供の面倒もみていなかった。

それでも理絵は我慢していたが、これを見かねた理絵の両親が健二に対して説教染みたことをいったことがキッカケで健二は家に帰ってこなくなった。これは浮気とかではなく健二が健二の実家に帰っただけだったが、それっきり給料は家に入れなかった。そしてその半年後に離婚をしていたが、健二からは慰謝料どころか1回の養育費ももらってはいない。そして理絵と2人の子供は理絵の実家に引き取られていた。理絵30才の春だった。

半年の4トンダンプドライバーから大型ダンプの会社に就職できたのは田中社長のおかげと理絵は社長にお礼をいっている。

「社長さん、なにもかもド素人の私をこんなに早く成長させてくださってありがとうございます」

「いや～理絵ちゃん、自慢じゃないが、ワシのところからダンプの運ちゃんになった奴はいっぱいいる。ほら、あのダンプを２０台も持って日の出の勢いの青山組の社長もうちにいた。あれはどないしょうない悪で少年院から紹介されてワシが普通免許、大型免許を取らして一人前にした。それに理絵ちゃんに紹介した会社の社長も無一文で転がり込んできて一人前にした。当時は、勉強のできない奴らはみんな運送屋や建設業に流れてきた。そのほとんどが、酒やバクチで身を滅ぼしている」

「そうでしたか～それでもダンプ仲間のみなさんは親切で...それにみんな明るい」

「妹の理絵奈ちゃんも俺が責任を持ってダンプに限らず大型トラックの運転手に育てて見せる。俺も来年７５歳だから最後の弟子だ！」

(３話につづく)

「小説 働く女性たち」～１６話

<http://p.booklog.jp/book/103226/read>

「小説 スーパーの女性たち」～１０話

<http://p.booklog.jp/book/102965/read>

「愛の人妻ウォッチング」～１０話

<http://p.booklog.jp/book/102977/read>

「京都歴史裏の小説」～８話

<http://p.booklog.jp/book/102990/read>

その3 私らトラック3姉妹やな～

理絵が大型ダンプのドライバーとして就職したのは「藤原興行」という青ナンバーの運送業でいわゆる白ナンバーの闇運送業ではない。昨今、この白トラの取り締まりも厳しく公共工事などでは白トラを排除する風潮にはなってはいたが、これらの白トラが日本の国のすべての建設を担ってきたことには変わりがなくこれも国土交通省の努力目標ぐらいの程度だった。しかし、それを安易に認めるわけはいかないので建前として一次、二次下請けにはこの青ナンバーの業者が優先されている。

しかしながら青ナンバーになれば近畿運輸局の管轄になるのでトラック運転手の待遇や福利厚生などの労働基準法を遵守しなければならない仕組みになる。したがって田中建設の社長が理絵に「京都で一番いいダンプ会社」を紹介するといった意味がここにある。理絵は田中建設の日給8000円から日給初任給として12000円を明示されて喜んでいて、さらに工事現場の都合で早出、残業すればこれも時給1875円のプラスとなる。そして年2回のボーナスもあるという。

理絵が大型ダンプに乗った2010年のころにはこの会社組織の青ナンバーダンプ運送業者というのは京都には2社しかなかった。ダンプカーの数として50台ほどで残りの約500台はいわゆる闇運送業者で1人親方が大部分を占めていた。この理絵のダンプデビューの工事現場は元キンビール京都工場の跡地の再開発で重機で掘り出された残土を積んで亀岡の残土置き場まで運ぶというものだ。

運転についてはさほど4トンダンプと変わらない。それにこんな大きなゼネコンの工事では10トン車に20トンも30トンも積み込む過積みもなく楽に走れてむしろ4トン車のほうが運転は難しい気がする」と理絵は考えていた。ダンプにはそれぞれ無線がついている、しかし、それは業務無線のような堅苦しさはなくこれも楽しい。

「はい～理絵ちゃん、本日もよしなに、老いの坂下り、霧が濃いから気をつけて...」

「はい～了解...303、お孫さんが生まれたそうで～おめでとう～」

「サンキュー、理絵ちゃんも結婚して早く3人目を生んだら...」

これすべて同じ周波数のダンプ仲間が聞いているから、交通渋滞やスピード取締りの情報が入る。はたまたどこそこの食堂が旨いとか、弁当がどこがいいとかの話で1日の仕事の疲れなどはさほど疲れないうにダンプ仲間で工夫しているようだ。理絵のダンプは桂の現場から亀岡の現場まで往復午前3回、午後3回走って初日の仕事を終えた。

理絵は実家に子供2人ともども居候していた、そこに子供はいないが離婚した妹の絵里奈、さらに三女の美樹は大学生を卒業して老舗の京漬物の店に就職したがなぜか独立を希望していない

。したがって両親と合わせて7名の大家族になる。父親は60才でサラリーマンをしているが、孫のお守はしんどいと65才まで定年を延長したと自慢している。したがって理絵の子供2人の面倒は母親が渋々していた。そしてその母親が、

「理絵、お前もそんな男勝りのダンプなんか乗っていないでいい男を捕まえて結婚したら...なんやったら私のついでで探しましょうか？」

「なにいつてんのよ～私は自分で自立して働くの！」

「ほう、ほな、孫を私に押し付けないで面倒見たら！」

とまあ～これは親子喧嘩ではないが、こういう会話を家族で毎日のようにやっていたある日、三女の美樹が理絵に、

「私ね～会社を辞めるかも...」

「なに～いつているの、この家で大学を卒業したのは美樹だけよ～お父さんもお母さんも美樹にどんなけお金を使ったのか知っているの？」

「そら～でもさ～老舗の漬物屋の正社員の営業っていても毎日2トンのトラックで配達ばかりよ～こないだ2トン車が車検でそれで4トン車に乗ったの。そら～大きくて気持ちよかった、理絵ネーチャンと絵里奈ネーチャンの気持ちがやっとわかったの」

「そんなの～絶対間違っています」

「あらら、理絵ネーチャンは間違っていないの？」

「私たちは、共に離婚したためにやむを得ずトラックに乗っているの」

「そんなナンセンスなことがこの世の中に通じるの？」

「いやいや、絶対ダメダメ、そんなのお母さんが泣くわよ～」

三女の美樹はこの姉の絵里との会話のあくる日から会社で配達に使うトラックを積極的に4トンの保冷車を使うようになった。ところが4トンというのは当然ながら2トンの倍の荷物が積めるから荷降ろしはしんどい、だから他の社員は乗りたがらないことをいいことに美樹がこの4トン保冷車を独占して配達業務をしていた。

この老舗の漬物店にすれば大学卒の美樹を入社させたのはトラックでの配達業務ではなく営業社員として鍛えて将来この会社の幹部にするためだった。そのためにはあらゆる仕事を覚えるための配達業務になる。美樹が入社して1年になったので会社は美樹にデパートの販売員として大丸に出向しなさいという辞令がなされた。その辞令を持って美樹は直属の上司の課長に、

「課長、私はこの漬物工場が好きです。あんなデパートより、ここの仕事をさせてください」

「君...あんなデパートというが、あそこで我が社の漬物を売っているから、信用があって全国から漬物の注文がある」

「それはわかっています。しかし、私は各店舗への配達や漬物工場の活気が好きなんです」

「君...君のやってきた1年の仕事というのはパートでも派遣でもできる仕事だ。君のような大卒の正社員がする仕事ではない、もっと夢を大きく持ちなさい」

「課長...パートでもできると思いますが、この会社でパートや派遣さんがいなくなったら誰が漬物を作るのですか？誰が売るのですか？私も正社員としてパートや派遣さんからこの1年散々イヤミをいわれてきました。

「あんたら社員さんはいい...同じ仕事をして給料は倍だと...」、
私はそれに対して耐えるしかなかったのです。あなたたちがいなかったらこの会社は存続さえしないと...それを課長は、パートでも派遣でもできる仕事だと差別するのですか？」

こうして美樹は会社を辞めたが、美樹にすればステップアップの一つとしての手段だと姉の理絵に笑って報告していた。理絵は、

「それで～どうするの？」

「うん、失業保険のある間に自動車教習場で大型免許を取るの、理絵姉ちゃん、もうデルタ自動車教習場に申し込んでるから来週から勉強よ！」

「そうなの～絵里奈も田中建設で4トンダンプに乗っているし、美樹もか～」

「そう、私らトラック3姉妹やな～」

「それで～美樹はどんなトラックを？」

「私はまず普通の箱型大型トラックで修行して、それから大型2種を取って観光バスのドライバーとして北海道や九州まで走るのが夢よ～理絵ネーチャン」

(3話につづく)

その4 絵里奈に恋をした現場監督

二女の絵里奈は理絵と同じように田中建設の社長に4トンの運転とダンプ操作を教えてもらいこれも1日で終了してそのあくる日からダンプデビューしていた。絵里奈は高校を卒業して大手の化粧品会社の美容部員になっていた。25才で高山博一と結婚したが、この博一は27才で歌が上手くて全国カラオケ選手権の京都代表にもなったとがある。元々は絵里奈が出張販売していたイオンの社員で近所のカラオケスナックで知り合っていた。やがて京都の芸能プロダクションからスカウトされて昼はイオンの営業部勤務、夜はスナックなどにキャンペーンと称して歌を唄っていた。

しかし、ギャラなどはもらえずどころかCD製作のための作詞、作曲料、ポスター製作、CDを1000枚買取で500万円ほど使っていたが、これは詐欺だと絵里奈に指摘されてからは歌手になる夢を諦めていた。そしてその博一と結婚していたが、再び大阪の芸能事務所から甘い誘いを受けて絵里奈の反対を押し切ってイオンを辞めていた。それに激怒して絵里奈は離婚していた。

その絵里奈の初出勤の化粧の華やかさはダンプ仲間どころか工事現場の男の監督、設計事務所の設計士まで魅了していた。理絵もこの現場で4トンダンプデビューして人気を集めたが、絵里奈の人気は理絵より3つつ若いというよりその派手な化粧からだとして理絵は理解していた。その絵里奈は昼休みに女性の監督、設計事務所の若い女の子や女性ガードマンら数名に化粧の仕方の基礎勉強を教えていた。そして京都市下水処理場現場女性の会を結成して女子会などを開催して酒を飲んでいた。

そんな女子会にこの現場総責任者の菅原現場監督も招待されていた。その酒の席でこの現場には女子が15名ほど働いている。しかし、トイレも更衣室も休憩室も男女同じでは男女差別ではないかと酒の勢いで菅原に迫ったら、その菅原現場監督は素直に、

「それはそうだ、これからは工事現場に女性が進出しなくては今政府が誘致している2020年のオリンピックの工事もできない、しかも、団塊の世代の作業員も技術者もすべて70歳を超えて退職する」

とかいってるが、これは絵里奈の魅力に負けた監督のその場限りの約束だと思ってはいたが、あくる日から本当に女性専用の2階建てプレハブの工事が始まっていた。建てられた1階は休憩室、2階は更衣室、そして女子専用と書かれたトイレまで設置されていた。もちろん冷蔵庫やテレビ、ロッカーも完備されている。

しばらくしたある日、この京都市営下水処理場工事を京都市長と市議会議員が視察していた。それを取材していた京都新聞の記者がプレハブの看板に「女性作業員専用」と書かれた看板を見つけて菅原現場監督に取材を申し入れていた。その時は昼休みで絵里奈は現場で働く女性10数

名に化粧の仕方を教えていた。これは化粧というより真夏の炎天下で顔が焼けて秋になればシミにならないための予防法だったが、これを記者は女性の身だしなみの化粧ととらえ、翌日の朝刊には、

「女性ダンプ運転手ら男の現場でも化粧忘れず」という大きな見出しで報じている。そして記事では「3Kといわれる男の職場に女性専用の更衣室、休憩所、トイレができた」というものだ。さらに菅原現場総監督の話として「大栄建設でもそうだが、日本のすべての工事現場は女性の力を借りなければビルも道路もできない。女性が安心して働く環境を整備するのは大手ゼネコンの責任になる」と言い切っていた。

この菅原現場監督というのは京都駅新築工事などを手がけて大栄建設でも筆頭の実力監督になるのでこの新聞を読んだ大栄建設の他の工事現場の監督は急遽、女性が3名以上働く現場にはそれぞれ規模に応じて女性専用の更衣室、休憩所、トイレを設置していた。まあ～結果的にはこうなったが、本当のところは菅原現場監督が絵里奈に恋をして、その過程のリップサービスだったことを5年後の建設業界紙で語っていた。

そして昼休みや仕事が終わった後の絵里奈の大型免許取得の教習がダンプ仲間の手で始まっていた。昼休みは学科試験、夕方には実地と、これは理絵のときより大掛かりのもので広い下水処理場の敷地に工事用のカラーコーンを置いて幅寄せやバックのコーナーまである。しかも京都府自動車試験場の大型試験の車と同じいすずの5トントラックがたまたま構内の散水車としてあった、これを現場場長の菅原現場監督の許可を得て借りていた。菅原はこの申し入れにOKをだしたばかりか菅原も絵里奈の教習を見学して絵里奈が車庫入れなどに成功すれば拍手をしていた。

菅原は大阪育ちで55歳になっていたが妻とは離婚していた。家は大阪の枚方にあるが工事現場ごとに近くのマンションを借りていた。この菅原はカラオケが好きでJR西大路駅周辺のカラオケスナックにはよく顔を出している。絵里奈も前の夫がプロ歌手の夢を持ったように絵里奈も歌が上手かった、そして絵里奈と菅原はよくカラオケスナックに行っていた。もちろん2人きりではなく現場の女子会のメンバーと同じだったが、それはそれでこの2人が妖しいという噂は違う工事現場の理絵の耳にも入ってきた。

その夜、理絵は絵里奈に、
「絵里奈...菅原現場監督と付き合っているって...本当なの？」
「理絵ネーチャン、付き合っているっていうほどでもないけど～よく、誘われているの」
「何を誘われているの？」
「何って、そら～カラオケよ」
「あの監督はもう55歳よ、絵里奈と丁度倍の27才も上よ」
「でも～そんな芸能界にはよくあるよ～」

「なにってのよ～あんた芸能人？」

そうこうしているうちに夏も終わり盆休みに入っていた。その盆休みに絵里奈は菅原の枚方の家に招待されていた。家は高台の高級住宅地にあり、今は2人の息子も独立してこの家は空き家同然になっているという。菅原は、

「あの下水処理場の工事 あと1年で終わる。その後はもう監督業を辞めて好きなゴルフ、釣りやカラオケ、そして嫁をもらって海外旅行と楽しみたい」

「監督...それって私へのプロポーズですか？」

菅原はその返事を言葉にせず、黙って頷いていた。

「監督、私はまだやるがあります。まず、この盆休みが終わったら大型の試験に挑戦します。そして大型のトラックの会社に入社して一人前のトラック運転手になりたいのです」

「俺はその絵里奈さんの夢を壊さないつもりだ、それに大型免許を取ったら大手セメント会社直営の生コン会社のミキサーカーの運転手に採用してほしいとたのんでいる、そしてその返事があった、もちろん採用で内定している」

「しかし、それはとても嬉しいけど...監督の顔でいい会社に入れば運転を教えてくれた仲間を裏切るようで...」

絵里奈はこの返事は少し待つてほしいと菅原にいつている。菅原もそれはそれでいいとした。2人は菅原が作った料理とワインで乾杯していたが、絵里奈は結婚はともかく菅原と今夜はなにかがあっても後悔しないと思っていた。そしてその通りになり絵里奈と菅原は一夜を共にしていた。

(5話につづく)

その5 絵里奈、現場監督と婚約

三女の美樹は、ほぼ半年ほど会社の4トン保冷車を独占で乗りこなしていたので運転には自信があり、デルタ自動車教習場でも模範といわれるほどの成績でわずか1回で学科も路上試験も受かっていた。そして失業保険の就職祝い金を奪取するためにハローワークの紹介で運送会社の就職を狙っていた。そこに「経験不問、大型免許所持者優遇」という運送会社があってその面接を申し入れていた。

しかし、そのハローワークの担当は美樹とその運送会社の求人案内を交互に見ながら、「この運送会社は色々問題があって若い女性には...」と口を濁していた。

聞けば、この運送会社は出来高歩合制で運賃の約30%を賃金としてもらえるが、高速道路料金は自腹になる。それが嫌なら一般道を走ることになるが、それでは仮眠、休憩する時間もないとハローワークに苦情が多数寄せられていわばブラック企業になるといっている。美樹は、「そんな運送会社をハローワークは紹介するのですか？」
「いや、それは...書類さえ整っていれば受理します」

美樹は大型免許は持っているが、当面4トン車で我慢しようと大型トラックが主体の運送会社でいずれ大型トラックを運転させてくれる条件の運送会社をハローワークの係りに選んでもらい面接を数回繰り返していた。5社目の面接で「京菱運送」に決定していた。この京菱運送は自動車会社のエンジンを名古屋の工場まで運ぶのだが、4トントラックへの積み降ろしはすべてリフトで人の手はなにもかからない。つまり、運転だけでこれを1日に2往復する仕事になる。賃金は土、日、祝日は休みで約20万円というから女性のパートから比べるとかなりいいことになる。さらに年2回のボーナスも業績にもよるが、ほぼ一ヶ月ずつだというから美樹はこの運送会社に決めていた。

出勤初日は会社の部長から就業規則の説明、会社の歴史、自動車会社との関係などをレクチャーされて1日は終わった。2日目は健康診断で病院へ行く。3日目は民間の保険会社の運転技術適正検査を受けたが、この結果は会社には知らさず美樹のところに直接郵送されるという。4日目～実際に荷物を積んだ4トントラックの助手席に乗り荷降ろしの手順と高速道路などの道順を覚えた。5日目は美樹が運転してベテランドライバーが助手席に乗り運転の指導を受けた。そして休みになり月曜日から美樹は1人で名古屋まで走っていた。このトラックには無線はないがケータイで会社とはいつでも連絡がつくから安心になる。

この2日間の同じトラックの車内で指導を受けた先輩の運転手の情報によると4トンを1年ほど運転してその間に交通事故などのトラブルがなかったら大型のトラックに乗れるシステムだという。そして行き先も東北から九州まであり、賃金も約25万～50万にもなるということを理絵ネーチャンら家族に報告をしていた。理絵は、

「そう、それはよかった。他のダンプ仲間に聞いてもあの京菱運送なら安心だと言っていたわ...」

「私も最初は運送屋というのは中高齢者が多いと思っていたわ〜でも、けっこう若いドライバーが多いの、それに女性も私で3人目だって」

そこに同席していた絵里奈も妹の就職を祝っていたが口数は少なかった。なぜなら余計なことをいって絵里奈と菅原現場監督の話に振られると困るからでなるべく静かにしていたが、その美樹が、

「それはそうと絵里奈ネーチャンとその監督との話はどうなったの？」

と、話を振ってきた。

絵里奈は理絵同様大型の免許試験は自動車教習場に通わず直接京都府自動車試験場で受けていた。学科は1回でパスして実地の1回目の試験では試験官が「運転技術はいいが、規定としている試験時間範囲よりも1分も早い」という理由で落としている。そして次はもっとゆっくり走りなさいと注意を受けている。そして2回目はゆっくり走り合格していた。

大型免許を取れば菅原の紹介で生コンの大型ミキサーカーの話はあったがこれは断っていた。その理由は色々あるが、まず一番の理由は理絵も絵里奈も世話になった田中建設の社長の田中哲三が脳溢血で倒れてしまった。田中の命に別状はないが、もうダンプの運転どころか入院してリハビリを受けている。そしてもう1人古くからいる運転手も70歳で引退していた。

田中には借金こそないが収入は年金の6万円程度しかない。しかしながら4トンダンプ3台を稼働させればなんとか田中の入院代や生活費は確保できる。そこで絵里奈は求人紙で女性の4トンダンプ運転手2人を募集していた。もちろん女性にダンプの経験者はいないから絵里奈が一から教えなければならない。1人は元宅急便の経験者、もう1人は家が魚屋をやっていて2トントラックを運転していたというから運転にはなにも問題がない。

こうして絵里奈は必然的に田中建設の社長の役割をするようになっていた。この件にも菅原現場監督が力を貸してくれている、大手ゼネコンの大栄建設からすれば田中建設は孫受けのダンプ会社になりなんら直接には関係はない。しかし、この現場の総監督としての力は見えないが圧力としてあり、この3台のダンプの仕事は確保されていた。そこで菅原は絵里奈に提案している、「絵里奈ちゃん、この現場はあと1年ある。その後俺は引退すると言っていたが、それをやめてまた土木の現場に行く予定だ。当然ダンプの需要はあるからここは思い切って大型のダンプを1台買ったらという」

「でも〜大型ダンプになると1台1200万円ぐらいはする...」

「もちろんそれはローンでいい、もし絵里奈がその気なら俺の次の現場でせめて二次下請けの権利を取得するように本社にいう。その資格も田中建設はもう40年も孫受けの業者として実績も

あるからこれも問題がない」

「...大栄建設の二次下請けなんてまるで夢のようね～」

「そう、その夢に向かって走らないか、絵里奈ちゃん？」

絵里奈は考えていた。たしかに菅原との結婚を約束、または結婚していればなにも問題はない。しかし...、そこで菅原それを察知したのか、

「絵里奈ちゃん、俺との結婚の引き換えとは絶対にいわないつもりだ」

絵里奈はこれら菅原との関係を家族に報告をしていた、そこで姉の理絵が、
「絵里奈、なんなら大型ダンプを2台にして今の4トンと合わせて5台になる。5台なら政府の規制緩和でゆるくなっている青ナンバーを取得して闇運送業から脱皮して堂々と運送業にすればいい。青ナンバーなら、菅原監督の世話にならずともどこの大手ゼネコンにも二次下請けとして入れる可能性はあるわ...」

理絵と絵里奈は田中の病室でこのことを説明していた。田中は、
「そうか～理絵ちゃんの好きにしたらいい。この話は絵里奈ちゃんが持ってきた話だが、ワシは理絵ちゃんに社長になってほしい。というのも昨日、菅原監督が見舞いに来てくれた。その絵里奈ちゃんと菅原監督の関係は俺も耳にしている。年が離れていても結婚するべきだ、それに絵里奈ちゃんには子供がいない、55歳の菅原監督はまだ子供ができるかと病院で検査を受けたら医者はまだまだOKだといった」

この話を聞いて菅原の優しさに感動をした絵里奈はすぐに菅原に電話して、
「結婚のお話...つつしんでお受けいたします」
(6話につづく)

その6 麺抜き、肉なしラーメン・たかばしのラーメン

2010年の暮れに病院でリハビリをしている田中建設の社長田中哲三、いや今は田中のことを会長と呼んでいる。その会長に理絵は正月の元旦に理絵の家にこないかと誘っていた。田中は、

「それはありがとう～しかし、正月にはもう50年以上も必ず行く店がある。これは恒例というより俺の心の誓いになる」

「そうなの～それで～理絵も絵里奈も社長とお供してもいいの？」

「いや～そんないいところではない...」

元旦の朝11時に入院している病院に田中会長を迎えに行くと田中は行き先を「たかばしのラーメン」という。絵里奈は思わず、

「えっ？ラーメン？」

たかばしのラーメンというのは京都駅近くのJR東海道本線をまたぐ跨線橋の袂にあるので高橋のラーメンという。絵里奈の運転している車の中で会長は、

「俺は青森の中学を卒業してすぐ京都に出稼ぎに来た。それは東京オリンピックの数年前でそれまでに新幹線を開通させるのだと連日の突貫工事だった。冬は寒く夏は暑いプレハブの飯場で寿司詰めで寝ていた。一応飯場だから米の飯は食わしてくれる。だが、おかずは弁当に梅干1個の日の丸弁当だった。それでは土方というきつい仕事では栄養不足になり倒れる奴がゴロゴロいた」理絵は、

「それでも、賃金はもらえたのでしょうか？それで栄養を...」

「いや～理絵ちゃん、俺らの出稼ぎの目的は青森で暮らしている両親やそれに妹や弟に金を送ることで一円の無駄使いもできない。そんな時にこれから行くラーメン屋に日の丸弁当を持ってラーメンを注文するが、それは「麺抜き、肉抜き」といって注文をする」

「それじゃ～スープだけなの？」

「そう、スープだけだ...それに入れ放題の九条ネギをいっぱい入れて食べた、それで1杯25円だった。それでも店主はいやな顔一つしなかったばかりか、たまに焼豚の切れ端を入れてくれた。それは俺だけでなく東北から出稼ぎに来ていたものすべての土方にしてくれた。

「そうだったの...あの新幹線ももしかしたらラーメンのスープのパワーで走っているのね」

やがて新幹線が開通して多くの仲間は青森に帰ったが、京都に残った者もいる、田中はスコップ1本で田中建設を立ち上げてそれが高度成長期で成功して約50人の飯場の親分になった。それにダンプも大型、小型で10台になり日の出の勢いだったが、バブル崩壊で不渡り手形をつかんで倒産した。それでも残ったダンプ1台で田中建設を残して今、理絵に受け継ごうとしている。

たかばしのラーメンは元旦の昼前でも行列ができています。会長は列に並びながら、

「ほれ、ベントを乗りつけ大きな顔をして並んでいるあいつも俺と同じでここの肉なし、麺なしのラーメンを食べてた奴だが、今では有名なやくざの親分になっている。それに今でてきた奴はテレビで宣伝している大手の消費者金融の社長だ、あれも麺なし組だ」絵里奈も、

「それで会長も元旦にここに...でも、みんな偶然なの？」

「いや、これは新幹線工事が終わって飯場の解散式で飯場のボスが、これからはみんなバラバラになるが、ここの苦労と新幹線を走らせた誇りを忘れないために初詣はここのラーメンに全員来ることといった挨拶からきている。俺もそれから50年も元旦にはここにきている」

店は狭い、それに4人掛けのテーブルはすべて相席になる。理絵ら3人にまた別の人が座っていたが、その人は会長に、

「おっ！田中ちゃん、ひさしぶり～」

と挨拶している。田中も丁度よかったこの理絵を紹介するから力になってほしいといっている。そこでこの4人は駅前の喫茶店に移動していた。

この男は日本に4社あるトラックメーカーのヤマト自動車京都販売の社長の矢上辰夫と紹介されている。会長によるとこの矢上は田中がスコップ1本で田中建設を立ち上げたが、やがてダンプが必要となってトラックメーカーに相談したが、どの会社も信用がないと月賦では売ってくれなかった。が、この矢上はまだ大学を卒業したばかりの新人営業マンだったが、上司を説得して田中に4トンダンプを納入していた。それから田中はすべてこのヤマトトラック、もちろん営業の矢上から買っていた。そして田中が、理絵が社長になって青ナンバーの運送業を目指していると説明している。矢上は、

「田中ちゃんは人を育てるのが上手いというのは昔から有名だ、そのおかげで田中ちゃんの弟子の藤原興行も青山組もそのまた孫弟子も我が社のトラックを使ってくれている。いわばそのおかげで私はトップセールスマンになってこうして社長になれたと感謝している」と改めて礼をいっている。そうして理絵に、

「わかりました、大型ダンプ2台安く納入いたします。それに営業ナンバー取得の件のほうも私がなんとかします。このところの規制緩和でかなりゆるくなっていて従来の7台なければ免許を降ろせないという理由は7台なければ経営がなりたたないところからきています。しかし、大手ゼネコンの大栄建設の現場との直接取引が確定すれば経営的には5台の車両でもいけます。というのも私も一応、京都陸運事務所の所長とはゴルフ仲間で...いやいや、これもあれもなにもかも田中ちゃんと知り合ったおかげと感謝しています」

そこで田中が矢上に、

「なんで矢上さんが正月からあんなラーメン店に？」

「何をいっているの田中ちゃん、この肉なし、麺なしラーメンの話をしてくれたのは田中ちゃんです。私もその話に感動して元旦とは限らないが、こうして社長になれたことの感謝を忘れないと毎

年初詣のつもりてきていました」

(7 話につづく)

「小説 働く女性たち」～ 1 6 話

<http://p.booklog.jp/book/103226/read>

「小説 スーパーの女性たち」～ 1 0 話

<http://p.booklog.jp/book/102965/read>

「愛の人妻ウォッチング」～ 1 0 話

<http://p.booklog.jp/book/102977/read>

「京都歴史裏の小説」～ 8 話

<http://p.booklog.jp/book/102990/read>

2011年の正月明けから京都下水処理場の現場に近い菅原の仮住まいのマンションに絵里奈は住んでいた。これは9月の末にこの現場の工事が完成したと同時に再婚同士だが、身内だけの結婚式を予定していた。この同棲には意味があり絵里奈は最低でも子供は2人ほしいと願っていた。しかし、菅原は56歳になっていたのだからまだ元気なうちに妊娠して、さらに2人目を計画していたからだ。

2011年3月に東北地震、つなみが東北地方を襲った。ヤマト京都自動車販売の矢上はこのニュースを見た後すぐにヤマト自動車本社に田中建設のダンプ2台を発注していた。これは地震の復興には大型ダンプがかかせない、それで理絵のダンプ会社が青ナンバーを取得するのを待っているだけではダンプその物が品薄になると判断したためだ。そして理絵に電話している。「とりあえずダンプ2台は押えた、陸運局への申請はまだだが、白ナンバーでしばらくは営業してほしい...」

「それでダンプの納期は？」

「なんとか3月末には、それには車体の色を早く決めてほしい」

その矢上が予想したように東北から冬場の出稼ぎに来ていたダンプは一斉に東北に帰ってしまった。そして復興の要請が京都のダンプにまであり京都のダンプが極端に減っていた。大栄建設の関西の現場にもこの影響があった。そんな折、菅原は東京の本社に田中建設と直接取引できる業者コードの申請をしていた。本社もダンプ不足の危機を感じたのかこの申請はすぐに通って田中建設は当時まだ4トンダンプが3台だったが、大手ゼネコン公認の指定業者になった。つまり、一次下請けになっていた。

その指定業者には株式化が必要になり、田中建設を株式会社として登録しようとなった。これは資本金1000万円のうち菅原が300万円、ヤマト自動車京都販売の親会社の近畿ヤマト自動車が200万円、そして理絵の父親が500万円投資するとなったが、これは父親と母親、それに理絵、絵里奈、美樹と各100万円の名義にして7名の株主で2011年4月に発足していた。

理絵は大型ダンプの車体の色をピンクと決めていた。これはこのダンプは女性が運転していますの意味で運転手も将来はすべて女性にするつもりだった。この時はまだ理絵は藤原興行のダンプに乗っていたが、新車が納入された4月からは田中建設のピンクの大型ダンプに乗っている。もう1台は当然、絵里奈が乗るがこれは絵里奈の妊娠までになる。そして絵里奈が妊娠すれば三女的美樹が乗ることになっていた。

4月から発足した株式会社田中建設は3台の4トンダンプ、2台の大型ダンプでスタートして

いたが、すべて女性のドライバーだった。理絵が女性の運転手にこだわったのは、こんな男の古い業界では出る杭は打たれるというのが鉄則で派閥争いや、はたまた各種利益団体の息がかかったグループもある。さらに暴力団のフロント企業としての業者もまだまだある。そんな中で新参ものの理絵が頭をだしてきたら叩きたくなるのがこれもまた人情になる。しかし、もしそんな業者、団体、親分とトラブルになってもそれらの配下のダンプ運転手が理絵や絵里奈、美樹などのファンで無線で冗談をいう仲間だったらこれは喧嘩にもならないとしたたかな計算をしてのことだった。したがってダンプ運転手を雇用する女性の条件は若くて綺麗でなくてもいいが、お洒落で綺麗に化粧して笑顔を忘れないことを社訓としていた。その化粧の指導は元化粧品会社の美容部員の絵里奈の役目だったが、そのせいか田中建設のことを「ピンク軍団」とか「キャバクラ建設」というあだ名がついていた。

東日本大震災の復興のために京都でもダンプの数が極端に減っていた。そのために田中建設のダンプは連日仕事があった。ヤマト自動車販売の矢上社長は中古車部に4トンダンプで程度のいい中古車がでると田中建設のためにストックするようにと命令していた。もし女性ダンプ運転手になりたいというのが現れたら、即このダンプの車検を受けてナンバーを付けて、それに田中建設カラーのピンクに塗装して納車ができる用意までしていた。

女性の運転手で大型免許を持っている人はまずいない。普通免許ならほぼ全員持っている世の中だからまず4トンに乗せて1年ほど修行させてその後に会社の費用で大型免許を取得させる方法を理絵は選んでいた。それともう一つ意味は青ナンバーになればそう簡単にダンプの増車はできない。今の白トラなら増車は運転手と貸しガレージさえ確保すれば自由に増車はできる。その青ナンバーの申請の時には4トンダンプは8台になり、大型2台とともに10台の車両の運送会社として陸運事務所に申請していた。つまり、キャバクラ建設には10名のホステスさんが所属していた。

田中建設の10台のダンプのボディーはすべてピンクの色で統一されていた。これはボディーに書かれている「田中建設」の名前を確認しないで遠くからでもピンク軍団が運転したダンプと分かるようになっていた。フロントにはそれぞれの番号があり、103はゆかりちゃん、109はひとみちゃんという具合になっている。

田中建設の会長の田中哲三は半身不随の不自由な体になってはいたが、電話番ぐらいはできると新しく借りた事務所に毎日出勤していた。田中の仕事は自社の10台のダンプの配車の他に大栄建設の各現場から請け負ったダンプの数を確保するために他の大型、小型ダンプを雇車する手配もある。この雇車のダンプを確保するのにはこれこそ田中の人生の40年間の人柄があるからこそ忙しいときは奈良、滋賀、大阪からも応援がかけつけてくれた。これこそ田中が理絵にいった「ガラは悪いが、この世界、一旦入ったら義理と人情の世界だ」になる。

(8話につづく)

2011年9月の吉日、絵里奈と菅原は結婚していた。再婚同士だからと遠慮して身内だけだとしていたが、そこは大手のゼネコンの幹部監督としては世間が許さなかった。この菅原が監督をしていた工事が民間発注の工事ならまだいいが、公共工事の専門の監督業では近畿の知事、近畿が地盤の国会議員も招待しなければバランスが取れないという奇妙奇天烈な理論がまかり通っていた。

菅原が結婚を機会に大栄建設の監督を引退するのならそれもいいが、まだ65才の定年までは9年もあった。そこでやむなく大栄建設主催型の披露宴になっていたので招待客は500名にもなった。その新婦絵里奈の紹介の肩書きは「株式会社 田中建設」の専務であったので披露宴会場からはどよめきがあった。そして絵里奈のお腹には赤ちゃんがいることの発表で会場は拍手と56歳の監督への冷やかしの祝辞がまた笑いを呼んですばらしい披露宴となった。

この披露宴の後すぐに近畿運輸局から田中建設が申請していた貨物運送業の認可が下りていた。このことを一つ見ても悪く言えば業界と政治と官の目に見えない癒着になるが、良く言えばこの男の世界に女の感性を吹き込む絶好のチャンスになると理絵社長は思っていた。

菅原監督の次の現場は桂川の久世橋から下流の淀までの川底を1メートル下げることと堤防の補強工事で3年はかかる大工事だった。この土木工事での主役はやはりダンプカーになる。その工事が始まって2年になるころ理絵の田中建設も台数は10台のままだったが、女性の4トン運転手のすべてが会社の費用で大型免許を取得していた。この4トンダンプから10トンダンプへの青ナンバー申請は簡単で手続きのすべてをヤマト自動車京都販売がしてくれる。

この10台の車庫は淀で借りてその敷地にプレハブの事務所があり、田中会長と絵里奈が事務をしていた。絵里奈の子供は生まれて一歳になっていた、その長男の祐一は菅原が借りていたマンションの近くの保育所に預けていた。そのころから女性のダンプ運転手も収入が増え落ち着いたのか結婚が2人、また3人目の子供を産むというめでたいことがかなり増えていた。この田中建設も株式会社で正規の運送業者ですから労基法を当然守ることになる。

それは有給休暇はもちろんのこと、産前産後の休暇も必要になる。それには予備の運転手の養成も必要になり、さらに女性の4トン運転手を募集したと同時に4トンダンプ5台の追加申請を陸運事務所に申請していた。これはなかなか難しいといわれているが、田中建設のダンプの稼働率はほぼ100%で運輸局が認可しないという理由は見つからずすぐに認可されていた。とはいっても、これも絵里奈の結婚披露宴での結婚外交というか、近畿の政、業、官を500名も招待した成果と理絵は思っていた。いわば絵里奈の披露宴を機会に田中建設はメジャーデビューしたのと同じになる。

さらに理絵は車庫の隣の民家を借りて保育園を経営しようと準備に入っていた。それは田中建設の社員の小さな子供は絵里奈の長男祐一の他にも3名いたが、これはまだまだ増えると予想はできる。しかも、この桂川堤防工事の関係者の子供となると鉄筋工、ガードマン、重機のオペレーター、作業員の女性の子供まで入れると20名は軽く超える。それにこの付近には大栄建設などの他にも大手ゼネコンの現場も無数にある。もしこの工事現場の近くに保育園があると作業員らはここで子供を預けて安心して仕事ができることになる。

この構想を社内で発表したところ元保母で実家が無認可保育所から認可保育所に格上げされた時に事務をしていたというダンプ運転手の46歳の大南真希さんが手を上げてくれた。この真希さんは夫の暴力が原因で離婚していたが、もう子供は大学生だった。そこで理絵は真希さんにこの計画のすべてを任していた。そして理絵は社長になってもダンプの運転手は辞めずに現場の華となっていたが、その理由を理絵は誰にも話していなかった。

保育園の改装工事に着手して保育所の名前も「働く女性のための保育園 きぼう」と命名されて真希さんは連日関係各所の役所に通い続けていた。とりあえず遅いお役所仕事に振り回されず既成事実を作るのが先決と理絵は保母さんを募集していた。

保育園長には理絵や絵里奈、美樹ではなく大南真希さんを指名してすべての権限を任していたことが田中建設で働く女性たちのさらなる信頼を得てそれが口込みで流布されて10トンダンプ運転手養成のための4トンダンプ運転手募集には25名の応募者があった。その応募者の書類審査、面接ではなるべく不幸な女性を優先するように理絵社長は絵里奈に命令していた。

そして同じ大栄建設の一次下請けの警備会社のパーマン警備保障から「働く女性たちのための保育園 きぼう」への出資の申し入れがあった。つまり、この警備会社も男の人手不足の解消として女性ガードマンを大募集していたのだった。そのためには保育所がなければならないのは時代の流れになっていた。警備会社が保育園に出資というニュースがNHKテレビで流れたのをきっかけに認可の手続きも急速に早くなり、2014年4月からの入所園児募集の手続きを始めていた。

この出資を名乗り出たのは田中建設と警備会社だけでなく、大手ゼネコンから大栄建設、竹内組、三洋工務店の3社とアトム引越センターだった。ここで初会合が開催されて新しい民間保育園として日本で初めてという「株式会社の保育園」にするという提案が満場一致で決定していた。つまり、この保育園に出資している関連企業で働く女性、それに父子家庭の幼児を対象とした保育園で園児の保育料は国の補助金と各企業の補助金があり、1子10000円2子目からは5000円と安く設定されている。

また保育園の近くのマンションを借り上げて母子家庭の寮を作って建築現場で働きたい女性を全国から大募集するという大プロジェクトに話が発展していた。この淀地区は京都市の南部で京都市内からも近く、長岡京市、向日市、八幡市、京田辺市、枚方市までは車でそれぞれ10分から20分範囲にあり、現場が変わっても通勤には便利になる。さらに京阪電車の淀駅もあり京都、大阪からの通勤も便利な場所にあった。

そして出資した各企業は保育所完備、母子家庭の寮ありの求人広告をだしていた。職種については鉄筋工、とび職、ガードマン、溶接工、ダンプ運転手、配管工、現場監督、設計士、引越し作業員、清掃員など50種類もあった。これらのすべての職種はかつては男の仕事としていた。この「株式会社 働く女性のための保育園 きぼう」の社長には元大型ダンプ運転手の大南真希が選ばれていた。

（9話につづく）

音川伊奈利の掲示板は、↓ここに感想などをお書きください。

<http://9124.teacup.com/kyototaxi/bbs?>

2014年3月、三女的美樹はあいかわらず10トンダンプを乗り回している。一応、田中建設の常務ではあるが現場では美樹ちゃんと呼ばれダンプ3姉妹としてのアイドル的存在を維持していた。この時の首相は安倍首相で「アベノミクス」や「一億総活躍社会」などをぶちあげていたが、大手の会社は正規社員を増やさず非正規社員、パートで人件費を安く抑えていた。

理絵は、

「私がこのダンプに乗ることを決心したのは時給750円のパートではたとえ月に200時間も必死になって働いても約15万円にしかない。これでは子供を育てることもできないと思ったのです。その最低賃金も807円（京都府・2014年）になったが、それでも16万円ほどにしかない。わが社は小型の最低日当は9000円、大型免許を取るとこれが13000円になりもしパートのように200時間働くと大型ダンプは325000円になる。もちろん残業割り増しもあるからそれ以上にはなる。これを時給に換算すると小型は1125円、大型は1625円になる。これに年2回の賞与で2か月分になるが私はこれでも安いと思っています」

ということを面接に来た女性にいつている。この面接に来た女性の不安というのは果たして女性でも大型ダンプが運転できるかが一番だった。そこでこの面接に来た女性を美樹が横に乗せて1日体験させている。その体験の時に色々その女性の生い立ちなどを聞くのが美樹の仕事だった。美樹は、この体験乗車の女性に

「理絵社長も絵里奈も共に旦那に苦労させられて離婚しているの。それで自家用車しか経験しかないのに田中建設の4トンダンプに乗ったのがこの会社の始まりで、私のようにこうして10トンダンプを乗り回している人はもううちの会社で12名、関西一円だともう100名は超えているの、こうして車体は大きいけど運転そのものは4トントラックよりも簡単だと」説明している。とここまで美樹が色々打ち明けるとその女性も必ず我が身のことを話しだすから不思議なものだ。

こうして1日体験の日当として8000円を支払っていた。もちろんまだ田中建設に就職するとは決まっていない。この田中建設の「男の職場 1 日体験」というのが京都新聞で大きく報道されると建設、運輸の会社でもハローワークを通じて大募集されていた。そしてその成果が次々表れて鉄筋工に女性が挑戦だとか、とび職に20歳の女性が入門、はたまた女子高校生の集団建設業 1 日体験に20名参加したなどのテレビや新聞の記事になっていた。

1 日体験だとはいえ女性が工事現場、または運輸業に来るとなるとどうしても女性専用の休憩所や更衣室、それにトイレを整備しなければならない。しかし、これはもう4年もの前に大栄建設の現場では当たり前のようになっていたが、この時から京都の「男の職場」がやっと気がついていたのだった。理絵が5年前に撒いた種がやっと育ったと菅原監督は我がことのように喜ん

でいた。しかしながらこれは京都のお話で全国的には残念ながら従来の「理絵はこの工事現場のトイレの汚さは経験がなかったほど不潔だった」というていたが、まだ理絵のような感性を持った女性は京都以外の工事現場には現れていなかった。

4月にオープンした保育園は園児は22名、保母さんは社長兼園長の大南真希さんを入れて8名でスタートした。この保育園は「株式会社 働く女性のための保育園 きぼう」が運営しているが、その付属母子家庭寮「きぼう荘」もある。部屋数は24部屋でその入居が始まれば園児数は40名を超える。

園長の真希さんはこの24部屋の部屋割りに頭を痛めていた。というのもこの会社の出資会社が全国のハローワークに「保育園、母子寮完備」という求人をだしたのだから次々入居申し入れがあった。もちろん各企業が面接をして採用が決定したものから入居すればいいのだが、それがもう50件を超えていた。各企業は人手不足の解消を期待しているので園長に対して「約束が違うと」と抗議する人事部長まで出てきた。真希は社長の理絵に相談していた。

理絵は、
「そんなに子供を持って働きたい女性がいるのに、ただ部屋がないという理由だけで断るのはこのプロジェクトの意味がない。真希さん、あなたが社長だからなんか考えなさい」と突き放していた。

そこで真希は淀地区が地盤の民自党の京都市会議員の「森川しんいち」に相談していた。これは真希がこの市議を知っていたのではないが、この市議のポスターに「困りごと相談」という一文がありこれが縁だった。その森川市議は真希に、

「この淀地区には市営住宅と府営住宅が10棟ある。そのうち空き家が30ほどあるが、これを企業に貸せないかということを考えている。しかし、これは前例そのものがないから京都市長に私がお願いしてみる。しかし、これは議会やなんやかやで時間がかかる...」

「それっていいですね～でも先生、この住宅に母子家庭が住むというのは京都市や京都府にも税金が入ります。それに空き家なら家賃も入りますから一石二鳥ではありませんか？」

「たしかにそうだが...早くするには国会議員を動かすのがいい...」

「先生、その国会議員を紹介してください」

こうして真希は民自党の国会議員に会いに上京していた。新幹線の中で真希は夫の暴力に震えながらの毎日、そして離婚して隠れるように過ごしていた。それを理絵に拾われて10トンダンプの運転手に、それが今では社長兼園長に、理絵社長の人の育て方に心から感謝していた。真希が会ったのは福島とおる衆議院議員でこの議員は快く国土交通省の委員会でその週に質問をしてくれた。答弁に立った安部首相は、

「働きたい女性の環境を整備するのは国の責任、地方で空き家になっている公営住宅を使いたい

という福島議員の意見には私も賛成します」という答弁を引き出すと同時に京都市長も京都府知事も真希に公営住宅の使用許可を出していた。

（１０話につづく）

こうして男の職場に女性が５０名も新規参入してきた。職種は２０種になり女性では無理だとされていたとび職、溶接工、配管工、重機のオペレーターの見習いまである。田中建設の大型運転手養成の４トン運転手も３名決定して母子ともども母子寮に引越ししてきた。この引越しもこの「きぼう」の株主のアトム引越しセンターが平日ながら格安で請け負ってくれている。

この母子寮に引越ししてきた女性たちは幼児は保育園に、小学生、中学生は淀の京都市立学校に転入していた。この母子寮から現場へはそれぞれの会社を送迎車をだしている。この大所帯になった「株式会社 きぼう」も新事務所を保育園内部から近くの借家に引越しして事務員の女性を３名雇用していた。やがて１年が過ぎたころからこの５０名のスマホやパソコンからブログ記事が発信されて「現場女子」という言葉が流行していた。

その仕事振などの他にも現場で働く若い女性の作業服からヘルメットの色、それに絵里奈が指導していた現場の化粧というトータルな話題が各テレビ局からホットなニュースとして流されていた。そして現場女子の賃金なども紹介されていた、この２０１５年の京都のコンビニの時給は８００円～８５０円ぐらいだった。これを観た非正規、パートの女性は自分の賃金の低さに驚いて現場女子になりたいという女性が増えていた。こうなると女性週刊誌も「現場女子」の特集を組む、その記事も「もう男の金を当てにしないで女性は自立しよう！」「賃金差別がないのは現場女子だけ」「男はいらない、結婚しないで子供を育てよう！」という過激なものばかりだった。余談だが、男子週刊誌の特集「美人すぎる現場女子」に絵里奈、「美人すぎるダンプ女子」に美樹がチャンピオンに選ばれている。

しかしながらこの京都でもガードマンを入れても現場女子はまだ２０％未満で全国的には８％しかない。しかし、この現場女子ブームを感じたひ弱な男たちも女に持てる一つの方法は「現場男子」になるという現象も少しだがでてきた。その証拠には大手ゼネコンへの就職人気は今までそんなになかったが、２０１６年には人気ナンバーワンの職種になっていた。そら～そうだろ～東大卒、京大卒の現場監督がいればその現場女子から持てるのは誰でもわかる。

その現場女子の発祥の田中建設の事務所に民生党の代議士福島とおる氏の他５名の超党派の代議士が訪問していた。理絵社長は、福島とおる議員に礼をいっている。

「先生、ありがとうございました。おかげさまで淀地区に限らず京都市内の空き家を使わせていただいています」福島は、

「いえ、当然のことです。それで今日伺ったのは、京都発の女性を３名以上働いている職場には必ず更衣室、休憩室、女子トイレを設置しなければならないことを法制化しようと思って来たのです」

「はい、女性が男の職場になじめない最大の理由はトイレの汚さです。トイレが綺麗になると女

性が進出してきます。そうすると男の作業員も汚い言葉を使わなくなり、現場も綺麗になり労災事故などもかなり少なくなっています。大栄建設などは女性が増えてから男の作業員同士の喧嘩はなくなったという報告もあります」

「女性の力で労災事故が減り、喧嘩までなくなるとはすごいですね」

こうして2017年1月の国会では満場一致で「女性の働く環境整備法案」別名「現場女子」法案が全会一致可決されている。

2020年のオリンピックのメイン会場の国立競技場の工事もやっと本格的になっていた。その他の会場、道路整備で冬場関西に出稼ぎに来るダンプは東京で使われていた。北陸のダンプも北陸新幹線の大阪までの延伸で関西にはこない。それにリニア新幹線の工事もある。この先、オリンピックが開催されるまでは京都のダンプは大忙しだった。理絵社長はそんなにダンプを増やそうとは思っていなかったが、「株式会社 きぼう」の株主でもある大手ゼネコンの竹内組、三洋工務店からも直接取引するようになっていたのでその需要のためにダンプをやむなく増やしていた。そして同じ青ナンバーの藤原興行、青山組と同じように大型ダンプ30台の運送会社になっていた。この3社で90台になるが、この3社とも田中哲三の弟子になりいわば兄弟会社となる。

理絵にすれば30台までダンプを増やしたことは兄弟子に失礼になるのではとかなりの気をつかっていた。その田中会長はもう82歳になっている、しかし、まだ元気でダンプの配車の仕方を女性の事務員に教えていた。このころになると各運転手への配車はすべてネットで発信されていた。そして自社のダンプ、雇車のダンプにもタブレットが搭載されて3ヶ月先の工事のスケジュールが公開されている。

ただこのダンプはまだ「現場女子」ともてはやされているから男、女とも運転手のなり手は増えているが、他の工事現場ではそうはいかない、職人が東京オリンピックの応援に行っているために工事は予定通りには進行しないという現象があった。さらに、昭和22年～24年生まれのいわゆる団塊の世代も67～69歳になり工事現場から引退するベテラン職人がどの現場にもいた。

理絵のダンプ業の大型運転手の養成は1年もあればできるが、そして「現場女子」ブームで京都の現場にも数百名単位で各職種に女性が就職している。しかし、これらの職種の仕事は1年や2年ではできないのが多い。つまり、この現場女子を育てるシステムが機能していなかったのだ。

そこで理絵は菅原監督に高齢で引退した職人を登録して現場作業などは免除した「現場指導員」という制度ができないかと相談していた。これはまだ見習いの作業員の横に指導員がついて直接指導するというものだ。これだと人件費は2倍いるが、工事そのものは確実に進行はする、そ

れに即、実地作業となるから男女に限らず仕事を覚えるのが早くなる。菅原は、

「そうか〜見習いだから見習いの仕事をするから数年続けても見習いの仕事しかできない。か
といって危険な仕事を見習いにはさせられない。そこでベテラン職人が横にいて作業をすれば危
険はない。それに指導だけなら高齢でもできるし、それが生き甲斐になりまたボケの防止にも
なる」

「そう、もうリタイアした職人だから時給もいない。もちろん見習いはベテラン職人の半分だ
から、2倍の賃金はいないと思う」

「せっかく、理絵ちゃんが現場女子ブームを作ってくれたのに、その女性を中途半端にはでき
ない。わかった明日本社の会議があるからこれを提案して見る」

（その11話につづく）

理絵が田中建設に入社してもう７年になり社員も５０名を超えている。それでも社長の理絵も常務の美樹もダンプの運転手をやめなかった。しかしながら社長は社長の付き合いもあるが、それはほとんど午後や夜になるので配車係りの田中会長も昼までの仕事とか比較的早く終わる仕事を理絵と美樹に配車していた。

理絵も美樹もダンプの運転にこだわる理由があった。それはどんな大栄建設の現場にも女子専用の休憩室があるからだ。理絵も美樹も絵里奈の作ってくれた弁当を持ってそれぞれの現場の休憩所でランチをしていた。そこにはこの現場のあらゆる種類の職種で働いている女性も昼にはここに集まる。理絵ここで働く女性の悩みや苦勞、要望を聞いていた。

ある鉄筋工の女性は６時に保育園に子供を迎えに行くのにはどうしても５時半には退社しなくてはならないが、それを親方に申し入れても返事もしてくれないという悩みだった。もちろんこの鉄筋工の会社は元受の大栄建設でもない二次下請けの西脇鉄筋工業になる。ましてや理絵との関係はなにもない、しかし、この鉄筋工の不足で困っていたのに理絵らが仕掛けた「現場女子」ブームで就職してくれたことには間違いがない。そこで理絵は西脇鉄筋の現場責任者である親方と話をしていた。

「親方～もう昔の職人気質では人は集まりません。大栄建設や三洋建設、それに竹内組も女性が安心して働ける職場として国土交通省からも認定を受けています」

「いやいや、理絵社長、それは誤解で俺も女性をいじめようとはしていない。俺が返事をしなかったのはそんなことをイチイチ俺の許可をもらわなくても定時になったらさっさと仕事を終えて子供を迎えに行けというつもりで返事をしなかった」

「そうだったの...」

「そら～俺も舌足らずだったが、いい腕を持っているのだから堂々と働いてほしい、女性の気遣いなんてものはここにはいない」

「でもね～親方、女性というのは耳で愛を感じるの...それにみんな残業しているのに自分だけ早く帰るという負い目もあるし...だから一言声をかけてあげて」

「まあ～理絵ちゃんがそういうなら俺も理絵社長が好きだと毎日告白してやる！」

「あらら、その気になってもいいのお・や・か・た！」

こうして親方と鉄筋工の誤解は解けたが、このような親方と新人女性の誤解は山ほどあり、これらを知るには社長室では絶対できないと理恵も美樹も毎日ダンプに乗り、それぞれ違う工事現場でランチをしていたのだった。

「株式会社 働く女性のための保育園 きぼう」も３周年記念を迎えていた。付属母子寮 き

ぼうの寮の部屋数も公営住宅50、民間借り上げマンションと合わせて74室になる。このころ各企業に就職した見習い技術者も腕が上がり賃金も上がっていた。この男の職場というのは男女の賃金差別はないのでみんな生活が豊かになったのか自家用車を買うようになっていた。そして寮から独立する女性も出てきた。

そして空き部屋になった部屋にはまた母子家庭が入居して「現場女子」がまた1人、2人と誕生していた。京都労働局の調査では2014年～2016年の2年間で建設、運輸に就職した女性は約3万人、そして離職率は10%だが、その離職した10%のうち5%が建設、運輸に再就職していた。しかも、正規社員率はほぼ100%になっているという。これは労働者の都合で時間を少なく働いている人もいるが、この業界にはパート、アルバイトという制度は元々なかった。なぜなら会社に就職することが即正社員であり、求人募集をするときもわざわざ正社員募集のような書き方は大昔からしていない業種になる。つまり、面接で就職が決まれば即正社員と誰も疑わなかった。

理絵は元々男の職場なのに男がこの建設、運輸業を嫌って、その反対に女性が増えていることの原因を調べていた。理絵の元夫も派遣社員だったが、給料が安くてグチばかりいっていた。そこで理絵は人から聞いた「トラック運転手なら日雇いでも8000～15000円になる」を聞いて夫に勧めていたが、夫は

「おいおい、理絵、俺みたいな大学卒にそんな仕事を勧めるの？」

「そんな～でも...派遣の夜勤は辛いから、昼間働いたほうが健康にはいいと...」

「運送屋に建設現場の土方、理絵は俺を馬鹿にしているのか？」

と、喧嘩したことを思い出していた。

また理絵が両親にトラックに乗るといった時の驚きは半端ではなかった。母親は、「そんな～ダンプなんて～ご近所にも親戚にも恥ずかしくて表を歩けない」といっていた。それに田中会長も「勉強のできない奴らが、運送屋と建設現場に流れてきた」ともいっていた。そんな偉そうに調査している絵里の田中建設はいったいどんな待遇なのかを自分で検証していた。田中建設の賃金体系は日当で出勤した日を掛けたものだ。そしてこの多くの現場の現業員も賃金はほぼすべてとっていいほど日給月給になっている。熟練工の日当は13000円～30000円であるが、他の産業では「日当」という言葉さえない。時給と月給というのが相場だ、いまでこそ現場には早出も残業手当もあるが昔はそれもなかった。

一方、同じ運輸産業の京都や大阪の市バスの運転手はこれは月給になる、それに年収も1000万円を超える運転手も多数いるという。これらは絶対に日当とはいわない。そういう意味では派遣社員も時給だが、この日給月給制の組に入る。つまり、月給取りと日給月給の違いが理絵の母親が言う「恥ずかしくて表を歩けない」になるのかと理絵なりに考えていた。この建設業というのは正月休みと盆休みはかなり長くなっている、それは職人が地方出身者が多いために帰省を

するが、これら全員が帰ってこないと工事は始まらないから休みが多くなる。休みが多いのはいいことだが働く日数が少ないと賃金も少なくなる日給月給制では真の労働者とはいえない。これがネックになって若者が敬遠している一つの原因にもなっているかもわからない。とはいえ、田中建設を月給制にするのは簡単だが、これは日本中の建設、運輸業の敵になるとも考えていた。

（その１２話につづく）

ある日の夕方、事務所にいた絵里奈は若い女性の５人組の訪問を受けていた。そのリーダーは３３歳のイケイケ姐ちゃんの愛子だった。この愛子は宇治、城陽のダンプ組織「愛企画」の代表で大型ダンプ２台、４トンダンプ３台を束ねていた。聞けばこの愛子らは理絵が仕掛けた「現場女子」に感銘してダンプ組織を作っていた。元々この愛子の父親らは１人親方のダンプ業者であった。その父親のダンプを引き継ぎダンプ運転手になった。この地域はそういう１人親方のダンプ業者がかなりいた。他の４名もそれで父親からもらったもう１０年以上の古いダンプで白トラをしていた。

この仕事というのは、１０トンダンプに２０トンは常識、ときには３０トン近い砂利を積んで走っていた。これでは目の前の信号がそろそろ黄色になるぐらいにブレーキーを踏まなければ横断歩道の手前で止まらない。この比率は４トンダンプでも同じになる。タイヤもすぐ減り大型なら１年で１０本換えて５０万円にもなるという。

しかも朝は７時から夏は午後の７時まで走っても運賃は同じだという。そこで絵里奈はちなみに１日の雇車の運賃はいくらかというと愛子は素直にこれだけという。その金額は田中建設が雇車する４トンや１０トンダンプより約３５％も安かった。しかも田中建設では過積みは一切禁止していた。それに早出、残業の運賃も出していた。絵里奈は、

「それでは車検や保険代、それに修理やタイヤ代を払えばお金は残らない...」

「はい、それでこうして５名首をそろえて相談にきたのです」という。

絵里奈はこの愛子ボスの３３歳というイケイケ姐ちゃんと同じ年であり、しかも化粧の趣味も同じで意気投合していた。

この報告を絵里奈から受けた理絵社長は、

「そう、しかし、宇治、城陽地域というのは私もそんなになじみがないし...噂では「愛企画」の仕事を斡旋している坂口実業というのは指定暴力団のフロント企業というし。この京都でも有名なブラック企業になる」

「おおおお～理絵姉ちゃんらしくないことをいうね...大きくなった田中建設をもう守りに入っているの？」

「いや、そうではなくそんな男の争いに巻き込まれている暇なんてないといいたいの絵里奈」

「うん？どういう意味なの？」

私たちはそういう男の面子だとかいう争いに女子力でなんとか生き抜いてきた。もし、田中建設が「愛企画」を傘下に入れたらどうなるかは絵里奈も分かっているはず、ここは女の頭を使って愛企画の５名を救ういい考えを絵里奈、考えなさいという。

絵里奈は素直に理絵姉ちゃんのいう妙策を考えていた。たしかにこんな時代には縄張りというものはない。しかし、法律がどうあれ自分の庭先を荒らされたらそれは男の面子としては許せないという気持ちも分かる。そこで絵里奈は「ダンプの過積みは社会の敵」というキャッチフレーズで京都営業ダンプ協会の会員らに過積み禁止を徹底周知していた。その背景を元に京都府警は宇治、城陽地域の国道24号線とそのバイパスを走る重量オーバーのダンプを徹底的に取り締まった。そしてそれを組織的犯罪として坂口実業を家宅捜査していた。

そしてその結果、暴力団のフロント企業といわれていた坂口実業は警察に解散させられていた。自由になった女5人組のダンプ集団「愛企画」は田中建設の下請けになることに暴力団とはいえ何も文句がいえなかった。理絵は愛子に、

「それでもやっぱり白トラの闇営業、愛子さんも私らと同じように営業ナンバーを取得して女性を幸せにする運送会社を経営するのならこの田中建設も絵里奈の夫の大栄建設も応援します」というと、愛子は涙を流していた。こうして田中哲三の孫弟子が誕生していた。しかし、この裏、つまり、国道24号線の警察による徹底取締りには理絵社長のしたたかな政治力が動いていたがそれは明からされてはいない。

愛企画のような女性だけのダンプグループは京都だけではなく日本中にできていた。それは理絵が仕掛けた「現場女子」「男の職場1日体験」「ピンク軍団」そして絵里奈が「美人すぎるダンプ女子」美樹の「美人すぎる現場女子」の日本チャンピオンになったなどのことを報道したテレビ、新聞、週刊誌の感化だった。

しかしながらその多くというよりすべてが孫受で運賃も安くたたかれていた。これでは建設、運輸の職場に女性が進出したとは喜べない。そればかりか過積が原因、過労が原因の悲惨な交通事故も起っていた。とはいっても白トラダンプがなければこの日本では道路もビルも橋もできないのは周知の事実だった。

そこで理絵は考えていた。タクシーには個人タクシーというのがあるが、なぜ？トラックには個人トラックがないのか？ダンプではないが、普通のトラックが運送会社から名義を借りて青ナンバーをとりつけ営業していた違法運送業者が検挙されたことがあることを思い出していた。ダンプの場合は元々個人営業が主体でこの京都市内近郊でもまだ白トラダンプが500台ほど走っている。もしこのダンプがなければ2020年のオリンピックの工事などは絶対できない。そんな大事な役割を持っているのに闇運送業のレッテルを貼られるはおかしいと思っていた。

絵里奈が仕掛けた「ダンプの過積みは社会の敵」という運動が実ってはいたが、白トラダンプの運転手からこれでは生活ができないという苦情も来ていた。それは砂利や砂、土砂、産業廃棄物を1トンいくらかで契約しているダンプは10トンダンプに10トン積んで走れば赤字になるというものだった。

(13話につづく)

理絵も絵里奈もこんな男のダンプ運転手の苦情は無視をしていた。なぜならもう４０年も５０年もダンプを運転してきて過積みをしなければ生活ができないという状況をまだ自分らの力で改善する気もなく、「過積みは社会の敵」というキャンペーンに抗議をする男どもにあきれかえっていたからだ。

しかし、これらのことを苦情や抗議ではなく理絵や絵里奈と一緒にあって少しでも改善する気があるなら相談に乗ると男どもに電話でも事務所への面会でも行っていた。すると男どもはたいがい、

「そら～田中建設は青ナンバーでセネコンの元受だ、それに絵里奈専務は大栄建設の監督の嫁だ、それと俺らとの立場は違う。俺らはこの仕事に命を賭けている」

そんなことに絵里奈は絶対負けない性格だ！

「私たちは女性が安心して働ける職場を目指してかなりの努力をしてきた。そしてこれからもこの運動を全国に広めるつもりだ。それに力を貸してくれるのは大先輩の貴方たちでしょう、貴方たちは４０年も５０年もダンプに乗ってきたのを自慢しているが、どの部分が自慢なのか私に教えて？」

「そら～俺たちは１０トンダンプに２０トンも３０トンも積んで走ってきた。これは女では絶対できないことだ！」

「そうなの～なら、これからもその自慢を続けたら」

その話を絵里奈から聞いた夫の菅原監督は「極度の過積みを認めている生コン業者からの生コンの仕入れはしない」と生コン会社に通達をだしていた。この生コンというのは砂と骨材（砂利、碎石）とセメント、水でできている。この砂と骨材を生コン会社に運んでいるのがダンプであるが、このダンプの運賃は１トンいくらで契約しているので積みば積むほど儲かるシステムになっている。もちろん生コン会社も資材を安く調達するにはこれらの過積みを容認していた。

もちろんそうすると生コンの単価は上がり工事の価格も上がるようになっている。これは大手ゼネコンにしても大きな痛手になる。しかし、もし京都のすべての生コン会社が搬入資材への過積みを禁止したらこの矛盾もなくなる。菅原はとりあえず大手セメント会社の直営の生コン会社を訪れていた。

生コン会社には必ずこれら資材を計るカンカン(計量装置)がある。このカンカンにダンプごと乗り、砂や骨材を降ろして再び乗ると、このダンプが運んできたトン数が分かる、これを菅原監督は見ていた。

１台目は砂で２５トン、２台目は砂利で２３トン、３台目も碎石で２０トン、４台目は砂で２

1 トン、この4 台だけで平均1 台2 2 トンにもなり1 0 トンダンプ積載量の2 倍以上になる。そこで菅原は工場長に聞いている、

「これは昔からか？」

「いや、昔はもっと積んでいたが、この工場は住宅地が近いのでそんなに派手には積まない。郊外の生コン工場なら2 5 ～2 8 トンは積んでいる」

「これはトン数で買っているのか？それなら資材の単価には？」

「そら～やっぱり響きます。業者も単価を上げてきますから...」

「しかし、宇治、城陽のダンプは重量オーバーの取締りがきつくてここまで多くは積んでいないのに生コン単価は上がっていない」

「それは...砂利業者、ダンプの元受が今まで儲けすぎていたのでは？」

この菅原の申し入れにこの生コン工場では極度の過積みダンプの出入りを禁止していた。しかし、これは氷山の一角にしかないが、この話は関西のダンプ仲間にその日のうちに無線で広がっていた。理絵も菅原監督もこの話の続きは当事者がすべきだと深入りは避けていた。

実は田中建設の事務所に「過積みキャンペーンは生活破壊だ」と直談判してきた男たちの耳にも入ってきた。これらは居酒屋で話をしている、

「あの腹が立つ女、そう絵里奈という奴の旦那が「極度の過積みのダンプを認めている生コン会社から生コンを買わないと」いっているそうだ」

「しかし、その極度というのはあいまいで何トンかはわからない」

「いやいや、それが実際にあの生コン会社に砂や砂利を運んでいるダンプの運転手の情報では今まで2 0 トンほど積んでいたが、それが1 5 トン前後に減ったそうだ」

「そうなれば、水揚げが減るのでは？」

「いや、それも砂利業者と元受に大栄建設の菅原監督と生コン会社の社長が訪問して運賃トン単価を上げてほしいと交渉してくれたそうだ、その結果元受と砂利業者が合わして2 0 %ほど泣くことになったらしい」

「しかし、1 5 トンでも重量オーバーになる」

「たしかにそうだが、警察も宇治、城陽のような極度の過積みは取り締まる。それにダンプの死亡交通事故があればただちに取り締まりは強化される」

「なにはともあれ俺たちにもそれが影響してきたらいいが...」

「そら～2 0 ～2 8 トン積むより1 5 トンのほうがはるかにブレーキは利く、それに燃費もいいし、タイヤも長持ちする」

この白トラは闇運送業を隠すために建前では砂利販売業となっている。たとえば、砂利業者から仮に1 トン4 0 0 0 円でダンプ業者に卸、それをダンプ業者が生コン工場に1 0 %ほどのマージンを取って売るというものだが、これは伝票上のトリックで実際は1 トン4 0 0 0 円×トン数の運賃でしかない。この建前を許しているのは戦後からこのダンプがなければビルも橋も道路もで

きなかったからだ。したがって警察も重量オーバーぐらいしか取り締まれない。しかしながら田中建設のように正規の営業ナンバーが増えてくるといずれ白トラとして検挙される日は近かった。

女5人組の「愛企画」の制服は迷彩柄の軍服のようなものだった。それを絵里奈は「男の真似をしてもそれはダメ、女は女らしくしなさい」とその迷彩服を禁止していた。そして作業服は1人1人のお洒落で個性がある服にして化粧も指導していた。そうすると男の現場に花が咲いたようになって男しかいない現場からの愛企画のダンプの指名が多くなってきた。絵里奈はリーダーの愛子に、

「愛企画の稼働率は90%を超えています。あと2人仲間を増やして7台にすれば営業ナンバーを取得できます。それはヤマト自動車販売がしてくれます。もちろん中古ダンプでもヤマト以外のトラックでも可能です」

「専務ありがとうございます。私たちの父親ら兄弟もダンプに乗っていますが、絵里奈専務の評判はすごいものです。あのキャンペーン「ダンプの過積みは社会の敵」の意味がやっとわかってきたようです」

「そうなの～みんな俺たちダンプがなかったらビルも道路も橋もできないという誇りを持ってほしいの」

（その14話に続く）

♥この小説へのご意見、または要望は↓の掲示板に自由に書いてください。

<http://9124.teacup.com/kyototaxi/bbs?>

三女の美樹は事務所勤務が嫌のようで営業や経理にまったく関わらず毎日１０トンダンプを運転していた。美樹の母親はもう３２歳になった美樹にことあるごとに見合いを勧めていた、その日も母親は、

「美樹...あんたもう３０を超えているのよ～子供を生もうと思ったら～そろそろ」

「お母さん～この里井家には理絵姉ちゃんの子供が２人、絵里奈姉ちゃんの子供が２人もいるじゃないの～」

「それはそれ、また別のことよ、やっぱり子供はね～」

「結婚なんて理絵姉ちゃんも絵里奈姉ちゃんも失敗してるやないの...」

「そんな～絵里奈は菅原さんと上手くいってる」

「それは～菅原さんが優しいからよ～そんな男なんてもういません」

美樹は大学時代から付き合っていた幸雄という男がいたが、美樹が老舗の漬物店の正社員を辞めてトラックに乗ることに顔を真っ赤にして怒っていた。その幸雄が、

「あんな程度の低い運送屋に美樹が...お前、気が狂ったのか？なんのために大学にいった！」

「なにを言っているの、理絵姉ちゃんは立派に大きなダンプを運転しているは...それに運輸、建設業には男女の差別はなく将来があるの...」

「将来？俺たちの将来はどうなる？」

「どうなるって？結婚しても私は働くは...」

「俺は...トラック運転手とは結婚しない」

美樹はこんな話の繰り返し嫌になり、それまでは幸雄の部屋でセックスを楽しんでいたがこれを一切拒否していた。セックスを拒否された男というのは情けないもので本性がむき出しになりさらに下品になるものだ。美樹にすれば姉の２人が現場で働いているのに「運輸、建設」と差別されることは絶対に許さなかった。

幸雄と決別したと同時に美樹は運送会社の４トントラックに乗っていたが、その時、２日間運転の指導をしてくれた男と付き合っていた。やはりその男も本人はトラック運転手なのにダンプの運転手を差別していた。その男はもちろん姉２人がダンプに乗っていることは知らないで、

「美樹ちゃん、トラックといってもピンからキリまである」

「そうなの～でも、働くということに違いはないから種類は違っても運転手はみんな仲間よ！」

「いや～それは違う、うちの会社は運送業だけど有給休暇も残業手当もある。それにダンプと違って積載オーバーなどはまったくしない。労働組合もしっかりしているので労働者の権利は守られている」

この２人はドライブデートの後には南インターのラブホテルで愛を確かめ合っていた。今日は

その3回目のデートだったが、この男の言葉で美樹はしらけていた。その時、後方から来たダンプが耳を劈く大きなクラクションで前を走っていた軽四輪を威嚇していた。そのダンプの荷台には一目でわかるほど山盛りの砂利が積んであり、その砂利がパラパラ落ちていた。この男は、

「ほら、あのダンプ、2倍以上の積載オーバーをしている。それに砂利を道路に落としているが、あいつらには常識や知性、教養どころか人間としての価値もない」

「でもそれは...運送屋さんのトラックだって色々あるし～それはそれぞれの個人の問題よ」

「美樹ちゃん、それは違う...」

「違うって～トラックだってその昔はガラが悪くて労働条件も劣悪だったと私が面接の時に運輸部長がいていたわ」

「たしかにそうだが、我々の先輩達が労働組合を作ってその劣悪な労働条件を改善させてきた。そのおかげで我々トラック運転手も社会的には少しは認められるようになってきた」

「それならダンプのおっちゃん達も労働組合を作って改善すればいいじゃん...」

「美樹ちゃん、そんなことあいつらには無理、無理」

美樹は心の中で「常識や知性、教養どころか人間としての価値もない」のないのはお前じゃん...と思っていた。

男の車はラブホテルに入ろうとしていたが、美樹は、

「あっ、ゴメン...私...今日アレなの、だから今日は家にこのまま送って」

といってこれまた彼氏とのセックスを拒否していた。そうなければどの男も急に不機嫌になり、本性をむき出しにするという現実をもう二回も経験している美樹は「もう男はいらない」と思っていた。

美樹はこの運送会社で4トンの修行をして1年後には大型のトラックに乗り、そして将来は大型2種免許を取得して観光バスに乗って日本中を走るのが大きな夢だった。ところがこのトラック運転手から姉2人が乗っているダンプの悪口を言われてからは「そうだ～姉ちゃんらが乗っているダンプの劣悪な労働条件を改善するために私もダンプに乗る」と決心していた。

もう、男はいらないと決心したことで変に男に媚びなくなったのか？美樹はキラリと光る知性的な顔になっていた。それがまた魅力なのか、現場の男たちを魅了する「美人すぎる現場女子」として殺伐だった男の世界に華を咲かせていた。

(14話につづく)

２０２０年のオリンピックの工事が終われば建設業界に不況の波が来ると予想されている。２０１８年の春には京都ばかりか全国的にこの白トラ、つまり闇営業のダンプ運送業がオリンピック後に摘発されるという噂が流布されていた。この自動車運送業の業界ではタクシー、バス、トラックも白ナンバーで営業すればすぐに摘発されるのにダンプだけが見逃されていては具合が悪い。

この問題はしばし国会で問題になっていたが、オリンピックの前ではただでも工事が大幅に遅れているのにこのダンプを摘発すればオリンピックの開催さえ危ぶまれていたからだ、しかし、五輪開催後には建設不況が待ったなしに来る、それにダンプの１人親方も高齢になるのでダンプ事故が多発する恐れもあった。この機会に白トラを一掃する計画が政府にあった。

もちろんこれを察知した白トラのダンプ業界も対策を考えていた。しかし、そのほとんどが高齢のためにこれを機会に廃業するダンプ運転手も多くいた。このころには「愛企画」も運送業の認可を取得してダンプの台数が１０台になっていた。そして京都もそうだが、全国的にもこの女性のダンプ運転手は増えていた。が、これらもやはり白トラの闇運送業になるからこの問題に理絵社長は取り組んでいた。

そこで個人で親子二代に渡ってダンプ業をしている二代目男女の運転手に個人ダンプの免許を与えるという方法はないかと民自党の福島とおる衆議院議員に相談をしていた。福島は、「個人タクシーというのは永年タクシー業に貢献したからという理由で免許が与えられている。その精神からいくとダンプもそうなる。その親の貢献度も半端ではない、戦後の復興、万博、新幹線、東京オリンピックも彼らがいなかったら成功は絶対にしていなかった。それを２０２０年の東京オリンピックの工事が終わったら違法だとして検挙するのには無理がある。それにダンプの運転手の社会的地位を上げるためにも個人ダンプを認める必要があると私は思う」

理絵は、

「そう、それには１人親方の皆様が協力して協同組合のような組織にしなければならない」

この話は全国に広がり田中建設のホームページは連日３０００回を超えるアクセスがあった。その掲示板には。

「もう５０年もダンプをやっているが、その本人には個人ダンプの認可はおらないのか？」

「親子二代というが、子供のいない家庭はどうなる？」

「２１歳から２０年もダンプに乗っているが、これはダンプ業界に貢献したことにはならないのか？」

「個人タクシーは１５年の経験で申請できるが、ダンプはなぜ？親子二代？、これも１５年の経験にするべきだ！」」

「極度の過積みで20年やってきたが、これは国に貢献したことにはならないのか？」

これらに対して理絵社長は、

「これはまだ民自党の提案でその提案もまとまっていない、法案提出までみなさまのご意見と要望を集めている段階」だと応えているが、そして「何にせよ、どんな形でもいいから、その地域、その仲間を集めてとりあえず協同組合を作ってほしい」と訴えていた。

さらに理絵は、

「仮に個人ダンプの制度ができて、過去に悪質な過積みで検挙されていたり、人身事故を起こした人、免許点数が少ない人にはこれまた常識にみても認可が降ろされないのは当然になります」

この理絵の意見を聞いた多くのダンプ運転手は極度の過積みを拒否したり、スピード違反に、交通事故に注意していた。その成果は国土交通省や警視庁にも届き、個人ダンプ、ダンプの青ナンバー制度の緩和の必要性がジワリ、ジワリだが浸透していた。東京オリンピックが始まる2年前の2018年の夏だった。

福島議員は個人タクシーの悪い例を調べていた。福島議員の地元の京都の陸運事務所に訪れて色々聞いていたが、この個人タクシーといえども悪質なタクシーがあつて乗客からの苦情は法人タクシーよりも多いという。たとえば京都駅でたむろして客引きをする「ポン引き」というのは個人タクシーがほとんどだか、これらを指導する彼らが所属する個人タクシー協同組合も手がつけられないというほど凶暴(背景に指定暴力団)だという。一旦、認可を降ろせばなかなか認可剥奪とはいかない。その二の舞だけはしたくないと国交大臣も記者会見で話している。

元々このダンプというのはガラが悪くて元暴力団員の構成員も数多くいる。ただただダンプ業界に貢献した、重大の交通違反をしていない理由だけで免許を与えればこの悪質な個人タクシーと同じにならないとか心配していると陸事の所長はいつている。福島は、

「それなら協同組合が管理するというのには無理があるのか？」

「その通りだ、彼らにはそんな権限はないし、やる気もない」

「それなら企業内個人ダンプならいいかも、この場合は青ナンバーの運送業の下請けで、その管理下に置けばいい、もし違法な行為をすればその親会社も共同責任になって行政処分ができる」

「それなら今走っているダンプの多くが対象になる。それともう一つは仲間7台集めて運送業の申請をする手は「愛企画」という見本もある。いずれにしても管理をするのは仕事を斡旋する親会社の運送業になる」

この会談の成果はすぐにも田中建設のホームページで公表されている。結局のところ仲間を集めて協同組合から運送業に転向するか、親会社を見つけて「企業内個人ダンプ」になることで東京オリンピック後の一斉闇運送業摘発から逃げる方法はこれしかなかった。そこで理絵の田中建設は自社のダンプの増車申請をやめてこの「企業内個人ダンプ」の受け入れの用意をしていた。

これはまったく田中建設が配車する下請けダンプと同じで運賃を支払いこれで経営するのが個人ダンプになる。つまり責任だけが親会社に重くなるシステムだと全国の青ナンバーの会社は拒否していた。

この個人ダンプの募集には女性と限らず男女ともいいとしていた。まだこの法案は国会にも提出されていないのに問い合わせが殺到している。しかし、この個人ダンプになるにもかなりきつい審査がある。もし、これに漏れた白トラがあるとすればこれも問題だと理絵は考えていたが、とりあえず全国の反対を押し切ってこれを「京都方式」として兄弟会社の青山組、藤原興行と共に実現させようと腹をくくっていた。

(その16話につづく)

♡この小説へのご意見、または要望は↓の掲示板に自由に書いてください。

<http://9124.teacup.com/kyototaxi/bbs?>

♡無料の電子書籍4冊できました。それぞれの題名で検索もできますから読んでください。

〔「小説 働く女性たち」～16話

<http://p.booklog.jp/book/103226/read>

〔「小説 スーパーの女性たち」～10話

<http://p.booklog.jp/book/102965/read>

〔「愛の人妻ウォッチング」～10話

<http://p.booklog.jp/book/102977/read>

〔「京都歴史裏の小説」～8話

<http://p.booklog.jp/book/102990/read>

♡既存の無料の電子書籍は

天使の恋～美幸...明美...真弓...梨香...4名の恋～全24話(読切り)

<http://p.booklog.jp/book/19028/read>

天使の恋～美雪...早苗...香奈～3名の恋の物語

<http://p.booklog.jp/book/18492/read>

♡音川伊奈利の電子書籍がすべて無料で読めます。

<http://p.booklog.jp/users/sakura64>

２０１８年の３月の東京オリンピック関連工事の進捗率はまだ４０％だった。予定では６０％ぐらいとなっていたが、なにせどの業種も人手不足で休日返上の声もでていたが、これには作業員すべてが反対していた。これらの関連工事を請け負っていた大手ゼネコンは全国から職人を派遣せよと大号令をかけていたが、元々、熟練工の大多数が来年の（２０１９年）４月に７０歳前後になり約２００万人の労働者が建設、運輸から引退する予定になっていた。これとて６５歳の定年を５年も引き伸ばしたからこそ４０％の工事ができたと理絵社長は思っていた。

菅原監督の大栄建設は理絵が考えた「現場指導員」制度を導入したおかげで見習いは中習い職人に、中習い職人はベテラン職人へと腕が上がっていた。同じ７０歳の熟練工は一旦は退職はしたが、この現場指導員制度で活躍していた。

この制度の話が全国の現場の話題になったのは大栄建設が導入を決定してからもう２年になる。その現場指導員制度を政府も東京都も国土交通省も東京オリンピックの工事に導入できないかと京都の大栄建設の現場に視察に来たが、この数がまた役人的で約１００名にもなり観光バス２台がチャーターされていた。そしてこれを取材する記者も約１００名となり現場は大混雑になっている。

この時の菅原監督の現場は西京区の大原野の山を削って公立大学のグラウンドと体育館を作る公共工事だった。これらの一行を乗せたバスとすれ違う大型ダンプは田中建設のもので車体は派手なピンクだった。そして運転手はみんな女性でダンプの窓からみんな笑顔で手を振っている。これにはお堅い役人も笑顔で手を振るしかなかった。そしてこれらのバスと報道関係の貸切ハイヤーを現場の駐車場に誘導するのもすべて女性のガードマンだった。

まず役人も記者も東京の男ばかりの工事現場しかイメージしていなかったからこれだけでド肝を抜かれていた。さらに山を削る２０台ぐらいの重機のユンボ（パワーシャベルカー）のオペレーターも３０才前後の色気のある女性が運転している。もう記者はこれだけでもスクープだとカメラマンに撮影を指示していた。もちろんこれは理絵のしたたかな作戦でこの日は京都中から女性の現業員を集めていた。

そして作業現場では見習い者には１人、中見習いは３人に１人７０歳を超えた男の熟練工がそれぞれついて作業を教えたり見守ったりしている。これは２人で作業することにはなるが、工事そのものはストップしないで工程通りの日程で進んでいる。本来はこれらの作業は熟練工がするのだが、直接指導することで危険を回避するばかりか作業を覚えるのが早くなる。現場指導員の時給は１０００円となっているが、人材を育成する金額としてはものすごく安くなると菅原監督は国交省大臣に説明している。

青木国土交通大臣は、菅原に、
「70歳を超えての現場作業は危険ではないのか？」
「いえ、指導員は直接作業はしません。横について指導するだけです。それに自分の技術を若者に伝承するですから生甲斐になると喜んでくれています」
「さっき若い女性がユンボを運転していたが、あれは？」
「あれも1人の乗りのユンボを改造して2人乗りにして指導員席にも同じ運転レバーがありますからこれで数ヶ月教えます」
「安部総理がいう、一億総活躍社会とはこのことか？」
「はい、これは京都方式といってこの理絵社長が発案したものです」

その一言でテレビクルーも記者も一斉に理絵にピントを合わせて理絵は質問攻めにあっていた。このニュースが放映されたのは2018年の3月25日だった。そして理絵38歳の誕生日でもだった。

青木国交相はこの65歳以上のあらゆる現場の退職熟練工を「現場指導員」として雇用する場合は時給1000円分を国が補助することを補正予算に入れると明言していた。そして新たに建設業界に見習いとして登録された建設業に就職した場合はその企業に補助金を出すと決めていた。これは見習い者が現場指導員の手で中見習い者になれば見習い者が現場から消えて、結局見習い者の仕事を中見習い者がしなければならないから効率が悪くなるからだ。

この現場見習いというのは男女、年齢、経験を問わないからいわば誰でも入社できることになる。しかも、特別最低賃金の職種として時給は1200円となっている。もちろんこれは最低だから人手がほしい企業はこれより高額になる。これを簡単にいえば企業としてこの新人を雇用すれば教育は政府の金で現場指導員がしてくれる。さらに企業に補助金があるということになる。

東京都はこの見習い現場作業員が母子家庭、または父子家庭の場合は都の公営住宅、保育所などを斡旋するとしていたのでこの法案が国会を通過する前から問い合わせが殺到していた。つまり、理絵や大栄建設の菅原監督が京都でやってきたことを国や都が見習ったことになる。この法案が確実に通ることを見越した企業はハローワークに一斉に「保育所完備、母子寮あり」の求人を出していた。

さすがに首都東京だけあって人が多い、この熟練工現場指導員の登録者は65～75歳までとしているがもう15000名を超えている。そして各企業の見習い職人、見習い作業員も時給がいいのかこれも18000名の面接が予定されている。この法案の施行は6月からとしていたが、5月からの前倒しを全会一致で決定していた。この見習い職人や見習い作業員の教育は本来その上の中見習い者が手取り足取り教育するのだが、この仕事を現場指導員がしてくれるから中見

習い者もベテラン、それに熟練工も自分の持ち場の仕事に全力を出せるから一気に工事の進捗率があがってきた。これで少なくともオリンピック関連施設のすべての工事にエンジンがかかることに間違いはないと政府も国土交通省も東京都も安堵していた。

また関東一円のダンプ業界にも新たな風が吹いてきた。それはこのオリンピックのすべての工事は公共工事になり、ダンプの積載量は当然ながら10トン車には10トンしか積まない。そうになるとダンプの運転というのは女性にも楽に運転できるようになり東京も京都や大阪のように女性大型ダンプ養成運転手がこれまた増えてきた。

警視庁ももうダンプを敵視せず模範運送業としていた。これはオリンピックの工事が終わった後にまた過積み暴走ダンプに戻らないための布石となる。そしてこれらダンプ業者の組織化、それに運送業としての青ナンバー登録を進め、その後に白トラ、闇運送業を一斉摘発する準備でもあった。

このオリンピック景気で日本中の建設、運輸の業種は忙しかった。しかし、それも五輪の工事のめどがつく2020年4月ごろまでだからもう残り2年の話になる。この2年間に警視庁がいうダンプの組織化、それに理絵が発案した「個人ダンプ免許」をなんとか法制化したいと考えていた。

（17話につづく）

その１７ ダンプの過積みはダンプの敵

２０１８年５月の上旬、衆議院議員の福島とおるは地元の選挙区を挨拶をかねて宣伝カーで流していた。議員の選挙区は京都市内の南部で幹線道路の国道１号線、２４号、１７１号線があるが、前から走ってくるすべてのダンプがクラクションを鳴らしながら窓から手を振ってくれている。

この福島議員の２年前の選挙ではこのダンプらに妨害されることはあったが、ダンプの窓からの声援というのは経験がなかった。そのころダンプの運転手らは、ダンプ無線で、
「俺らダンプ運転手の気持ちを国会で質問してくれたのは福島議員だけだ...その福島議員の乗った宣伝カーが、国道１号線を南下している。みんな見つけたら声援しろと」誰かとなしに命令していた。

その福島議員の宣伝カーは淀の田中建設の事務所にいた。理絵は事務所のダンプ無線を福島議員にも聞いてもらっている。福島議員は、

「いや～前から走ってくるダンプのすべてから身振り手振りの声援を受けた。本番の選挙でもこういうのはなかったから少し驚いている」

「先生、「この世界というのはガラは少し悪いが、一旦入ったら義理人情の世界」なんです。先生がダンプ運転手のために個人ダンプの免許を法制化していただけることに努力している姿は日本中のダンプ労働者にＨＰやブログで発信されています」

「そうでしたか～いや、実は今日ここに来たのはその報告です。理絵社長が提案した「個人ダンプ免許」の法案を昨日、民自党の会議で承認されました。この法案には与党も野党も反対することもないので成立します」

「そうでしたか...ありがとうございます」

「しかし、その反面、白トラの闇運送業の摘発も同時に行われます」

「先生、東京オリンピックの開催中はそれもないと思いますが...」

「はい、それはないが、建設不況になる五輪後のチャンスを国交省は狙っています」

理絵社長はこの福島議員との会談のすべてを田中建設のＨＰで流していた。これによると２０２０年のオリンピック閉幕まであと２年半しかない、それまでに現在の白トラダンプはたった二つしかない選択肢を選ばなければならなかった。一つは仕事を保障してくれる元受け運送会社の下請けとなり、その会社の「企業内個人ダンプ」になること。しかし、これは個人に与えられる免許だから審査は相当厳しくなる。たとえば３年以内に交通事故、交通違反をしていない。ダンプ経験が１５年以上あって６５才以下のもの。

これに該当しないダンプ運転手は７台以上で協同組合を立ち上げて輸送量の実績を記録して陸運事務所に営業ナンバーを申請することになる。この協同組合を結成するのは簡単でまず「規約

」を作り、理事と理事長を選任すればいいだけだ。これだけで「〇〇ダンプ協同組合」としての活動はできる。つまり、この団体を関係役所等に届けなくても協同組合としての実績（規約、理事長）さえあればいい。しかし、陸運事務所はこの協同組合に営業運送の認可をするかしないかは、この輸送実績で果たして会社として健全経営できるかの判断をするから安い運賃ではなかなか認可は認められない。それには荷主に対して運賃アップの交渉が必要になり、かつまたそれが協同組合の仕事となる。つまり、生き延びようと思ったら組合員が戦わなければならない。もう、それが嫌なら闇運送業で検挙されるしかない」と理絵社長はHPで挨拶していた。

この理絵の意見に広島男性ダンプ運転手は、
「戦う？それなら労働組合と一緒に。我々はこれでも1人だが経営者だ！」
これに対して理絵の意見は、
「組織の名称は協同組合、共同組合、互助会、はたまた労働組合でもいい。戦うというのは1人ではなにもできないから団体で交渉するという意味になる。ダンプの運転手が労働者か経営者というのはそんなに大きな意味はない。この小さな組織をまとめて都道府県単位で連合会を作れば力は3倍にも5倍にもなる。その力で「過積みしなくても生活ができる適正な運賃」を政府や大手ゼネコンに要求する」

これに対して福島とおる衆議院議員も意見を書いている。
「この企業内個人ダンプにしても青ナンバー取得にしてもそんなに簡単ではなく時間がかかる。しかし、日本中に理絵社長が提案しているダンプの協同組合が増えればその連合会が窓口になって政府、政党、それに各県の運輸局と交渉ができる。この交渉中になにがなんでも白トラは違法だからと闇雲には検挙はできない。もし、これらの組織化ができなかったらダンプの過積みはなくなるから検挙の道になる。これは都道府県単位の警察が判断するが、まったく組織化されていない県から検挙が始まるのは目に見えている」

これに対して青森のダンプ運転手は、
「そら～大手ゼネコンの仕事をする田中建設と我々とは違う！」
理絵は、
「この京都でもそうだが、オリンピックの工事など公共工事のダンプはすべて過積みはしていない。この工事が終わればダンプの仕事はかなり減る。そこにまた倍ほど過積みするダンプが増えたらこの少ない仕事は半分になる。そこで我々は「過積みをしたいが、政府や警察がタメだというから過積みはできない」というしたたかな考えを生かせばどんな荷主も運賃を上げるしかない。これの抜け駆けをするダンプは警察が厳しく取り締まる。つまり、官、政、業（ダンプ）の癒着になる。」

この「ダンプの過積みは社会の敵」というキャンペーンに反対する勢力は悪質なブラック企業が暴力団のフロント企業でしかない。さらに理絵は、
「トラックメーカー4社が協力して企業内個人ダンプ、協同組合に加盟していない個人のダンプ業

者は過積みを前提としているのでダンプを東京オリンピック以後は納車しないとしている。また協同組合であっても暴力団が関係する協同組合にタンブは納車しないという決定もしている。これも官、政、業（トラックメーカー）の癒着になる。

ちなみに理絵社長は政治力という言葉をよく使うが、お世話になっている福島とおる議員はもちろん他の政治家にも政治献金どころかパーティー券1枚買っていない。いわば〜トラック3姉妹の女子力だけで男の職場に花を咲かせた、その花の種がまた花を咲かせるように仕掛けている現代の「仕掛け人」でもある。

田中建設は社会健康保険、それに厚生年金にも加入している。しかし、京都の多くの1人親方、それに数台ダンプを持っている個人企業で働いている運転手もそんなものはなくそれぞれが国民健康保険、国民年金に加入している。ところがこの理絵の提案している個人ダンプ、協同組合が結成されれば「京都建設関係保険組合」から加入してほしいという申し入れがあった。

この建設関係の関連企業は今でこそ社会健康保険、厚生年金、そしてこのような京都建設関係保険組合に加入しているが、その昔はまったくの無権利状態だった。ところが、このダンプ業界だけがポツンとこれらの保険から取り残されていた。これだけを見てもダンプ協同組合の必要性があるとHPで訴えていた。

田中建設のHPのアクセスは1日で約5000回を連日越えている。もちろんこれを読んでいるのは味方だけではなくタンブの運賃が適正価格になるのを恐れている輩も読んでいる。それに大手ゼネコンから中小零細工務店も神経を尖らせている。なぜなら10トンダンプに10トン、4トンダンプに4トンしか積まなかったら工事そのものが高くなるのは目に見えているからだ。

理絵のしたたかな作戦はこれらのことを日本中に発信してそういう流れに持っていきたいと思っていたからだ。もし日本のダンプの運賃が同時に適正になればどの大手の工務店もどの工事の発注者も工事の入札でこれらを取り入れるから工事は少し高くはなるが他の工務店との条件は同じになり、入札関連には影響しないからだ。それには抜け駆けのダンプ業者をけん制する必要がある、実際に大手のゼネコンではダンプ運賃の単価の上昇を見越して入札していた。それが下請け、二次下請け、孫受けのダンプにも利益となって返ってくる。そしてこれに逆らうダンプ業者は「ダンプの過積みはタンブの敵」となる日を夢見ていた。

（18話につづく）

愛子の営業ダンプ運送会社「愛企画」はもう大型ダンプ７台、４トンダンプ５台の合計１２台で運転手はすべて女性だった。元々、愛子のグループは宇治、城陽の出身で親や兄弟もダンプ稼業だった。そしてやはり会社の事務所と車庫は宇治にあった。運送会社の認可が認められたころの仕事は１００％田中建設の下請けだったが、愛子の地元ということで宇治、城陽の中堅建設会社からの直接の依頼も多くなっていた。

その仕事の受注が多くて愛企画のダンプが足りないときは愛子の兄やグループの親兄弟の１人親方ダンプを雇車していた。つまり、妹や子供の女性である青ナンバーの正規の運送会社から男である親や兄弟が下請けになるという奇妙な逆転現象がここでは起っていた。愛子はこれら雇車のダンプに対して協同組合設立に力を貸していた。そしてできたのが「宇治、城陽ダンプ協同組合」という名称のダンプ協組だった。組合員は１６名ですべて大型ダンプだった。そして理絵の田中建設も宇治、城陽の現場には地元のこのダンプ組合のダンプに仕事を回していた。

これは田中建設の事務所に３発の銃弾が打ち込まれた事件があったが、この犯人らはやはり宇治、城陽の暴力団と見られていた。そこに田中建設のピンクのダンプが走ることはなにかと問題があったからだ、しかしながら、愛企画と宇治、城陽ダンプ協同組合の運転手はこの地元でこの暴力団構成員とも同級生や元同僚、親戚関係、中には元暴力団の仲間だった人物もいるので、まったくこのダンプ協組には手はだせなかった。

愛子は宇治の府立高校に入学していたがわずか１年で退学になっていた。その理由は校内での喫煙と他校の女子生徒との乱闘、それに不純異性行為などなどだった。父親はダンプの運転手で毎夜毎夜仲間と酒を飲み夜も昼も家にいなかった。母親はこんな父親に愛想をつかして愛子が高校１年のときに離婚していた。愛子は母親の実家に引き取られていた。実家といっても京都府営住宅で母親とその両親との４人暮らしになる。母親は近所の建設現場の寮（飯場）のまかない婦として働いていたが、この飯場というのは作業員の弁当と朝飯を作るために朝の５時から働いていた。

愛子は退学と同時に大久保のスナックに年を１８才と偽って働いていた。そして２０歳の頃、このスナックの客でこれも４トンダンプの運転手といい仲になり同棲同様の生活をしていたが、その男が飲酒運転で死亡事故を起こして本人も亡くなっていた。そこで愛子はその男の意思を継ぐためにその男の４トンダンプで白トラをやっていた。やがて大型免許を取得して中古の大型ダンプを購入、こうして高校時代の不良仲間を集めて「愛企画」というグループを作っていた。

そして理絵社長に拾われて６年、今では「株式会社 愛企画」の社長として宇治、城陽の中堅建設会社３社の元受会社になっていた。この宇治、城陽地区というのは国道２４号線とそのバイ

パスしか幹線道路はなかった。この24号線を警らするパトカーの後部トランクには簡易のカンカン（計量装置）が積まれている。パトカーが過積みのダンプを発見したり、110番通報があれば停止させこのカンカンの板を道路に4枚置いてダンプを乗せて計量を計るシステムになっている。

もちろん愛企画のダンプもその雇車は過積はしていない。したがって京都府警も愛企画と「宇治、城陽ダンプ協組」の看板をつけたダンプを模範として愛子を宇治警察署と城陽警察署の連名で「京都交通栄誉賞」という賞を愛子に授受していた。これは何を意味するかといえば、この宇治、城陽で過積みするダンプは警察が徹底取り締まるという宣戦布告の合図になっている。そしてこれをキッカケに宇治、城陽ダンプ協組に入りたいというダンプ運転手が増えて今では35名の京都府で一番大きなダンプ協組になっていた。こうなれば発注先の中小建設会社も砂利販売業者もダンプ運賃の適正化のテーブルにつかなければダンプの1台も現場にこない、仮に非組合員が抜け駆けをしても過積みすれば警察に、積載重量を守れば低運賃で経営はできない環境になっていた。

この宇治、城陽というのは京都府の南部にあるが、なぜかこの地域はカラオケスナック、カラオケ喫茶、カラオケ教室がやたら多い街になる。そのせいか宇治市民文化会館、城陽市民文化会館には月1回必ずカラオケ大会が開かれている。出演者はそれぞれの芸名に舞台衣装も自前で持っている。そしてカラオケ名人を歌手にするというプロダクションも数社ある。

この街のアチコチには「〇〇エンタティメントレコード専属歌手・青山たかし」などというカラーの大型ポスターが貼られている。それも1人や2人ではなくおそらくこの地域には約50名の歌手がいることになる。これは各政党の宣伝ポスターより目立ちまた多いことになる。愛企画の女性ダンプ運転手もカラオケが大好きで社長の愛子ともどもその地域のカラオケスナック、カラオケ喫茶によく顔をだしていた。

愛子は宇治の市民会館で開催される市民カラオケ大会ではもう3回も優勝している。そして城陽の運転手の由香里はCDデビューまでしていたが、これはお遊びであって宇治、城陽地区ではそんなに珍しい話でもなかった。しかし、それが故、カラオケ大会に優勝したり、CDデビューした歌手というのは人気者になる。そのカラオケ大会には宇治市、城陽市の市幹部も参加している。それに宇治警察署、城陽警察署の署長以下警察官も参加している。

それらの出演者もカラオケ喫茶の客も愛企画のメンバーの個性豊かなファッションと化粧、それに笑顔のトークに魅了されたファンがいっぱいいた。もちろん仕事はダンプの運転手ということは明らかにしているから国道24号線でダンプに「愛」というピンクの看板を見つけたら一般市民、お年寄り、子供どころか警察官も市の役人も手を振ってくれていた。こうなればダンプの運転も静かにやさしくなるのは自然の摂理になっていた。理絵社長が提唱している「市民に愛さ

れるダンプ」を愛子は忠実に実践していた。

(その19話につづく)

理絵は福島とおる代議士の手配で国会議事堂の大臣室で青木国土交通大臣と面会していた。この大臣は与党の民自党ではなく光進党から選出されていた。本来なら大臣に直接陳情するなら菓子折りの中に１００万円ぐらいの政治献金が必要になるが、理絵は福島議員に菓子折りは持っていくが白い封筒は入っていないがそれでいいかと聞いている。福島は、
「もうもそんな時代ではない、それに私は与党の議員だか、企業献金と団体献金に反対している」

こうして理絵は約１０分という短い時間だったが、青木大臣と話をした。理絵は、
「私の田中建設から仕事を１００％斡旋しているダンプは３０台あります。その他に同じように仕事を元請としている運送会社は２５社、そして同じように仕事を斡旋しているダンプ台数は２２０台あります。合計２５０台のダンプを「個人ダンプ業者」として営業をさせてほしい。そしてこれら以外に協同組合を結成している組織は３５組合になります。これらの組合が近畿運輸局に営業免許申請ができるようにしていただけたら幸いになります」

青木大臣は、
「その件は福島議員からくわしく聞いています。とりあえず京都府を「ダンプ特区」として合計２５０台の個人ダンプの申請、３５組合の営業認可申請の要領を近畿運輸局に決めるように指示しました。今後のこの件の窓口は近畿運輸局と話し合ってください。これは予断になるが、役所というのはなにかと屁理屈をつけてきます。理絵社長が近畿運輸局に日参するのを私は期待しています」
「大臣、ありがとうございます」

理絵は近畿運輸局への要望として個人ダンプ営業免許の試験の素案を作っていた。個人タクシ一の学科試験では京都市内、近郊の主な道路、公共施設の建物の場所など地理の勉強が試験の主体になるが、ダンプは不特定多数の客は乗せないからこの試験は不要になる。そこで、
一、一般常識＆最新時事の本から問題を１００問出して７０点以上が合格。
一、道路交通法の学科試験、これは大型免許試験と同じにして７０点以上が合格。
一、経験、３トン以上のダンプの経験が１５年以上。かつ６５歳以下の者。
一、過去３年間に免許などの行政処分を受けていない、かつ点数が３点以上あること。
一、過去１年間の貨物取り扱いの実績と今後１年間の見通し。

ダンプ協同組合、またはダンプ業者からの営業免許は７台以上で申請ができるが、これは自動車貨物運送業の申請と同じになる。

これは素案であることを前提に田中建設のＨＰに掲載していた。反応はすぐに掲示板にあった。

Aさん「ワシは中卒だから、そんな試験は無理になる」

理絵「とりあえず本屋さんで一般常識&最新の時事の本を買って判断してください」

Bさん「営業ダンプの会社とは取引がないので無理だ」

理絵「それなら協同組合を作るか、どこかに加盟してください」

Cさん「免停を1年前に受けたが...」

理絵「それならあと2年間無事故無違反で、ちなみにもしこれが認められても即闇営業の取り締まりはなく、猶予はオリンピック後の2年ぐらいは認めてもらいます。ですから、まだ3年半もあります。

Dさん「特区というが、これは滋賀県や奈良県は？」

理絵「京都でこれが成功すればいずれ全国に波及するが、それはその県の協同組合の取り組みで早くなったり遅くなったりします。京都は見本として前を見て走りますが、これを参考にしてほしい」

Eさん「この申請はいつから？」

理絵「まだ分かりませんが、しかし、この素案に対してダンプの皆様が支持していたたけるのであれば私は近畿運輸局に日参して1日でも早く認可申請の日を決めるつもりです」

Fさん「青ナンバーの申請はいつから？」

理絵「これは従来の貨物運送業の申請とまったく同じですから「ダンプ特区」を待たずに各都道府県の陸運支局で受け付けています。そのやりかたは行政書士さんなどに相談してください」

Gさん「個人ダンプにも青ナンバーにも該当しないダンプは？」

理絵「それはどうなるかは分かりませんが、しかし、その白トラ、闇営業のダンプを使う現場は確実になくなります」

そして総論として理絵は、

「まだダンプ特区の認可は国会でも決まってはいません。しかし、この話があってからは確実に極度の過積み、それに交通事故、違反は減っています。そしてダンプに乗りたい、建設業界に入りたいという若者というのも京都では確実に増えています。日給から月給に社会保険なども一般のサラリーマン並みにするためにも京都方式を全国から見守ってほしい」と訴えていた。

この夜、深夜の2時ごろ田中建設の事務所の玄関ドアに3発の銃弾が打ち込まれていた。防犯カメラには2人乗りのバイクから発射された映像が映っている。そのバイクはすぐに見つかったが、これは八幡市で盗難されたものだった。伏見警察書はこれは理絵社長がダンプの近代化、それによって宇治の坂口実業が解散された逆うらみだと判断して捜査していた。その背景になったダンプの過積みや個人ダンプ免許の話題がこれまた新聞やテレビで報道されたおかげで一気に「ダンプ個人免許・京都特区」の法案が話題になり2018年9月の国会で全会一致で可決されていた。

理絵ら近畿運輸局への交渉団は理絵、絵里奈、美樹、それに愛企画の愛子ら化粧とお洒落なら

誰にも負けない女性を選抜して１０名の女性交渉団で近畿運輸局長に連日面会を求めている。運輸局側も役人１０名を選び会議室で話合うが、それは役人と美人すぎる現場女子との合コンの雰囲気でも和気藹々の話し合いになっていた。こうして「個人ダンプ事業免許」の申請は１１月１日～１１月３０日として試験は２０１９年１月となった。

（その２０話につづく）

「個人ダンプ免許」の申請まで3ヶ月、学科試験までは4ヵ月もあるが、それぞれのダンプ運転手は一般常識&最新時事の本、大型免許学科試験の本を購入して勉強していた。いいだしっぺの理絵もこの本を買って読んでいたが、これとて毎日、新聞を読んでいればそんなに難しくはないが、なにせ勉強から遠く離れたダンプ運転手には重荷だろうと講習会を予定していた。

京都府のダンプ特区の「個人ダンプ免許」の試験を受ける運転手は約250名と予想されている。道路交通法の試験は運転免許更新時にそれなりに勉強しているからなんとかなるが、頭の痛いのは「一般常識&最新時事」の試験になる。この申請は一応ダンプ歴15年以上とはなっているので理論的には18才で3トンに乗っていれば33歳で資格はある、ところが現実には50〜65歳がほとんどになる。

理絵社長の話では毎年この試験は行われてたとえ試験に落ちても東京オリンピックまで2年、その後の猶予が2年で4年間はまだダンプに乗れると計算する運転手もでてきた。一番運転手の世代が多いのは団塊の世代は（1947〜1950）となるから2022年には71歳〜74歳になる。実際にこの年になるまでダンプを運転する人は少ないのでこれはこれで問題がない。

ただこの「個人ダンプ免許」は一代限りではなくこの権利を譲渡することができる。もちろんこれも個人ダンプを申請して試験に受かった人にしか売れないが、これはもし65歳の人が新車、もしくは中古のダンプを購入して70歳で廃業してもダンプと権利を譲ればそれなりの退職金代わりにになる。それにもしこれらの運転手の息子や娘がダンプの経験が15年以上あれば親子二代で個人ダンプ事業者にもなれる。という夢があればこのダンプ業界にも若者が参入することにもなると理絵はなるべく65歳以下の運転手にこの個人ダンプの免許取得を勧めていた。

理絵はとりあえず伏見区の京都陸運支局の自動車会館の大ホールを3回に分けて借りる手配をしていた。それは「一般常識&最新時事」の学習会で午前3時間、午後3時間の6時間の予定だった。1回の学習会では自信のない人は2回、3回でもいいというルールで参加者を募っていた。絵里奈も一般常識&最新時事の本を買ってその中から100問の模擬試験を考えてそれを小冊子にする準備で大忙しだった。

そのころ大阪の近畿運輸局から「個人ダンプ事業許可申請用紙」が京都陸運支局に届き理絵社長は支局長に挨拶していた。

「支局長ありがとうございます。それと一般常識&最新時事の講師を支局長にお願いしたいが...」

「いやいや、私なんて...それより京都府の総務課長を私が知っていますから、その課長を紹介します」

「それはそれはありがとうございます」

実はこの支局長と理絵はこの陸運事務所の目の前にあるカラオケスナック「ドレミ〜♪」でカラオケ仲間だった。この店と支局長を紹介してくれたのが絵里奈の旦那の菅原監督でこの日のためにではないが、いつか役に立つと布石を打ってくれていた。もちろんこの日の前日には理絵と支局長のデュエットが...これも愛子から教えられたカラオケ外交になる。

京都府内でこの企業内個人ダンプを受け入れる青ナンバーの運送業者は25社のうち9社しかなかった。それはその運送会社が元受となり企業個人ダンプ事業者に責任を持って仕事を斡旋するという責任があるからだ。このまま日本の経済が失速すれば元受といっても仕事は減ることになる、自社の仕事もないのになんで個人ダンプの面倒までみる必要があるのかというのが理由だった。

これでは忙しいときには配車料という名目で少くない金額をピンハネをしているが、いざ、暇になったらその責任はないという理論になる。理絵社長からすれば配車料というのはこういう暇なときでも元受と下請けが仕事を分け合い共存共栄するためのもので決して取りっぱなしのピンハネではないと思っていた。

人間社会ではもし食料が乏しかったら親は我慢して子供から先に食べさせる、そして余ったら親が食べるというのが当たり前。これがダンプ社会、いや、これは建設会社も自動車製造業も同じで親会社が先に食べてその残ったものを子供である下請けにお情けで食べさせるというのが現状になる。しかも親が儲からないと子供の下請け会社への単価を切り下げるという行為はもはや人間ではなく餓鬼になると理絵社長はHPで書いている。

というのもこの「企業内個人ダンプ」というのは元受の運送会社が下請けの個人ダンプに仕事を斡旋するという条件付きだから、その会社の運転手が個人ダンプになりたくてもそれを保証（推薦）する会社がなければ申請すらできなくなっている。つまり、京都府では約250名の個人ダンプ希望者がいるのに企業内個人ダンプを受け入れる会社は9社でその運転手は150名ぐらいにしかない。

その昔、悪質な駕籠屋や馬車匹きがいた。これらは客の足元を見て客が困っていたら法外な運賃、手間賃をふっかけてその日、その時さえよかったらいいという生き方をしていた。それでは町民から愛されず彼らのことを「雲助」と呼び町民から嫌われたという話があるが、これを少し前の2000年以前ならとりわけタクシーとダンプになるだろう。タクシーは幸い異端児のMKタクシーがこれに気がつき改善されたと同時に他のタクシー会社も見習った。ところがダンプはまだこの「雲助」体質が残っていると理絵社長は同じくHPで嘆いていた。この日のアクセスは1万回を超えていた。

個人タクシーというのは法人のタクシー会社に勤めていてそこから試験に受かったらタクシーを購入して営業するシステムになっているが、この「個人ダンプ事業者」というのは元々、白トラで営業していた者の特別救済処置として免許を受けることになる。そしてこれらの白トラが完全になくなったところからタクシーと同じように法人ダンプ会社に勤めていた運転手が対象になるということだった。

(その21話につづく)



愛子の「愛企画」が仕事を斡旋している男のダンプ運転手の３人からこの「個人ダンプ事業」をやりたいという申し入れがあった。その３人ともまだ５０代で若く経験もあり資格はあったが問題が一つあった。それは３人とも京都府営住宅に住んでいるために「個人ダンプ事業所と運転手休憩所」を自宅では開設できないというものだった。たしかに公営住宅は住むためのもので営業所などは認められていない。ところが個人ダンプ申請には事務所と運転手休憩所の賃貸契約、見取り図などの提出が義務つけられている。さらにダンプの車庫は通学路に指定されている道路に面していない場所にあることとなっている。そして事務所と運転手休憩所と車庫の距離は５００メートル以内になっている。

この簡単なようで簡単でない問題をクリアしなければいつまでも白トラ、闇運送業のままと愛子は知恵をしぼっていた。一番いいのはダンプを駐車できる土地を借りてそこに事務所兼運転手休憩所を建てればいいのだが、これには莫大の費用がいる。この男たちのダンプの駐車場は公営住宅の近くの民間のガレージを借りているが、ここは団地の近くということで通学路に指定されている。

そこで愛子はこの３人が協力してダンプが３台置ける駐車場を借りて事務所兼運転手休憩所はどこかの現場の中古のプレハブを購入して、そこを３個人ダンプ共同事業所として使えば費用は三分の一になると提案していた。もしその費用がないのなら愛企画がお貸しします。もちろん返済は月々の運賃から天引きしますというこの男らは喜んでいた。

こうなると話は早いもので無料に近い土地代で竹林を貸してくれる人が現れ、その竹林を伐採して整地の碎石を運ぶのはダンプの本職でこれを日曜ごと親戚、仲間一同でやれば一ヶ月で荒地は整備された。そしてプレハブと簡易トイレもかなりのボロボロだが無料で手に入れていた。これは街中では絶対できない芸当だが、宇治の田舎の山林地区のでのこのホットな話題をこれまた地元の京都新聞が「ダンプ運転手仲間の団結で個人ダンプの城できる」という見出しで大きく報道してくれた。

結局のところこの男３人組は愛企画から金を借りなくても仲間の力と知恵でこの問題を乗り切っていた。この竹林の持ち主はまだまだダンプが増えれば竹林を伐採してもいいといってくれているので個人ダンプがまだまだ増えても安心になる。そしてこの話題も愛企画のＨＰから全国に発信されていた。

そのころこの宇治市から愛企画に電話があった。宇治市は新しい事業として女性センターという建物を建設するが、これは地元の建設会社を優先的に使うが愛企画からもアイデアがほしいということで社長の愛子と専務の真希、常務の麗美の３人で市長と会談することになった。

市長側は市長と助役と市議会議長の３人だが、この６人は宇治市民文化会館で月１回開催されているカラオケ大会の常連メンバーで顔なじみ以上の関係だった。

市長は、

「宇治市から過積みのダンプがなくなり昔のようにダンプ公害という言葉も忘れ去られています」

愛子も、

「宇治市の公共工事には愛企画をいつも使っていただきありがとうございます」

とまあ挨拶をしているが、これも美人すぎる現場女子との合コンの雰囲気になっている。市長がいうのには女性センターの建設だから女性の意見を聞きたいというものだったので、愛子は、
「市長、どうです日本で初めての女性だけで女性センターを建設しませんか？そう、設計から施工まですべて女性の手で造るのです」

「ほう、すべて女性の手は初めてか？」

「はい、日本どころか世界で初めてです。ギネスです。」

「愛子ちゃん、できるか？」

「もう、京都の工事の３０％は女性が活躍しています。危険なとび職の女性もここ６年で２０名ほど育っています。タワークレーンのオペレーターも菅原建設だけで５名、くい打ちのオペレーターも５名もいます。鉄筋工、溶接工、配管工、電気工、タイル、砂官工の総計は３００名です。それに測量士、生コンの圧送、生コンのミキサー運転手は５０名、もちろんパワーシャベルは５０名、それにダンプ運転者は１００名です」

「もう、あの現場指導員制度から６年か～」

「はい、京都中の女性の技術で世界初の女性だけの建設をするのです」

こうして女性だけで造る宇治市女性センターの入札が始まっていた。入札したのは宇治の中堅建設会社３社の協同企業体で設計は宇治設計事務所、もちろん設計士も現場監督もオール女性の工事着手と同時にこのニュースはＮＨＫどころか世界に発信されていた。それと同時に「愛企画」を企画会社と勘違いした日本の一流企業からも企画の仕事の依頼があった。

その夜、愛子企画の社員１５名とトラック３姉妹の理絵、絵里奈、美樹で宇治大久保のカラオケスナックを借りきって乾杯しているところに城陽市の市長ら幹部が訪れて愛子に、

「愛子ちゃん、水臭い～こんな美味しい話を宇治に取られて～なんで先に城陽市に声を掛けてくれなかったの...」と悔しがっていた。愛子は、

「市長、城陽市も女性だけの工事を発注すれば？」

「そやな～砂利採石場の跡地に女性スポーツセンターでも造るか～女子プロ野球に女子ソフトボール、女子サッカー、女子競輪もある」

「市長、それもいいアイデアだけど、女性だけの重機専門教習場を造ったら？、パワーシャベル

、タワークレーン、クレーン車、玉賭け、とび職、くい打ち、それに大型ダンプとすべて合宿制にして全国から女性を集めるの、もちろん先生はこれも60歳～75歳の熟練退職者の男の人で、そう、重機の現場指導員制度かな？」

「愛子ちゃん～それいいね～あのダダ広い跡地なら模擬ビルを建てて実際に重機を使って訓練もできる。それにその模擬ビルを使って消防、警察、自衛隊まで災害などの訓練もできる」

「市長～愛企画に企画料を払ってよ！」

「そうか、そうか...それなら今夜のこの宴会の費用を私のポケットマネーで支払うが...これで？」

これには一同、大拍手で歓迎していた。本来なら政治家を飲食等で接待しなければならないがこの理絵、愛子らの女子力で政治家に金を払わすのはこれまた日本初だった。

(その22につづく)

♥この小説へのご意見、または要望は↓の掲示板に自由に書いてください。

[http://9124.teacup.com/kyototaxi/bbs ?](http://9124.teacup.com/kyototaxi/bbs?)

京都府で営業ダンプが許可されているダンプ会社は３０社ほどあるが、そのうち２５社が「京都営業ダンプ協会」に加盟していた。この協会の理事長は青山組の社長だったが、青山組はこの「個人ダンプ事業」に賛同して自社の下請けダンプ運転手３０名を推薦していた。ところがこの「個人ダンプ事業」に賛同している会社は９社で残りの１６社はこの制度を拒否していた。つまり、理事会では１６対９でこの個人ダンプ事業を協会としては認めないということが決議されていた。

そこでこの９社は京都営業ダンプ協会から脱退して新たに「京都府営業ダンプ・個人ダンプ共同組合」を立ち上げていた。これは営業ダンプとこれから先に許可される個人ダンプ事業者も会員にするという案からだった。この９社から推薦をもらっている個人ダンプ事業予定者はこれでもいいが、残りの１９社の個人ダンプ事業予定者約１００名からは不満の声が田中建設のＨＰに多く寄せられていた。

Ａさんからは「これでは下請けのダンプを組織化しただけで本来の永年ダンプ業界に貢献した者に対する個人ダンプ事業にはならない。誰でも資格さえあれば申請できなければ意味がない」これに対して理絵社長は、

「まったくその通りです。京都ダンプ特区というのは現在白トラ、闇営業をしているダンプへの特別救済処置であり、一定のルールを決めるための組織化になります。それが荷主の推薦がなければ申請すらできないのは不利益になると判断してこれをもう一度考えなおす時間をほしい」と訴えていた。

理絵にすれば一般社会の風をこのダンプ業界に吹き込みかったが、やはり雲助体質が色濃く残るこの業界では無理かと悩んでいた。その夜、理絵の家ではトラック３姉妹が知恵をしぼっていた。三女の美樹が、

「理絵姉ちゃん、私が大型免許を教習したデルタ自動車学校では誰でも試験は受けられるの。そして最初にもらうのが仮免許なの、そして路上教習試験で受かったら本免許がもらえるの...」

「そうなの免許の二段構え？」

「まずそれで誰でも資格さえあれば試験は受けられる」

「そか〜一つクリアしたね、美樹」

「そう、それでその仮免許は数年、そう５年ぐらいは失効はせず、新たな親会社を見つけてその会社から「推薦」を貰ったらその仮免許が本免許になる」

「おおおお〜美樹、やるじゃん！、それ、その話を持って明日近畿運輸局へ行きましょう」

この話は以外と簡単に認められていた。なぜなら個人タクシーにはこの「仮免許制度」があったからだ。それはまず仮免許を取得してから個人タクシー事業の免許譲渡までの時間はこの仮免

許のままで譲渡が決まったら本免許の青ナンバーが交付されていた。

理絵社長はこのことをそのままＨＰで発表していた。この「仮免許」という制度を導入することで誰でもいつでも資格さえあれば個人ダンプ事業者候補になれるという妙案に対して京都営業ダンプ協会のダンプ会社から仕事をもらっていた運転手から喜びの声がヤンヤと届いていた。その反面、この９社がもっと仕事を取らねばこの話の実現は難しい、それにこれ以上の仕事となると分裂した「京都営業ダンプ協会」と「京都府営業ダンプ・個人ダンプ協同組合」の戦争になると理絵は腹をくくっていた。

一方の個人ダンプ事業を認めないダンプ運送会社もこの新たにでてきた「仮免許」制度には頭が痛かった。今までは子飼いの下受け業者は違法な運送業であるがため、元受のダンプ会社から仕事を貰わなければ生きてはいけなかった。たとえば過積みを命令されても従うことしかなかった。サービス残業は当たり前。しかし、これでは不満が溜まるので夏はバーベキュー大会、そして冬は温泉旅行と下請けダンプ運転手を連れては行ってはいたが、この経費はグループから去ると運賃から天引きするという話もある。

またこの旅行でもそうだが、日ごろの飲み会の後でも麻雀や花札の賭け事が始まる。社長は負けた運転手には気前よく金を貸してはいたが、これは当然ながら借金として残る。つまり、下請けのダンプ運転手を生かさず殺さず飼い殺ししているダンプ運送業者もある。

ところがこのダンプ業者が飼い殺しているはずの会社の運転手のなんと２０名が個人ダンプ事業者に申請するつもりでもうパチンコやバクチをやめて「一般常識＆最新時事」の本を買って勉強会を開催しているという。これを聞いた社長はただちに理絵の計画をぶつつぶすつもりで理事会で反対して一旦は成功したように見えたがこの「仮免許」の制度で下請けの運転手が無線で喜んでいるのを聞いていた。これでもしこの２０名が「仮免許」に受ければ時間はかかるにせよ我が社から去っていくのは目に見えていた。

また個人ダンプを認めていなかった別の社長は理絵がＨＰで嘆いていたことを思い出していた。それは、

「もしヒマになったら親会社は下請けと仕事を分かち合い共存共栄を目指さなければならない、そのための配車料という名目のピンハネだ！ピンハネの金を自分の物だと勘違いしてはいけない」

この社長は理絵に電話して「我が社の運転手の５名が個人ダンプ事業」の免許を受けると勉強している。もし受かったら私が責任を持って下請けでなく同じダンプ経営者として共存共栄したいと思っている。理絵社長、この５名をよろしくお願いいたします」

この個人ダンプ事業を認めていない営業ダンプの社長というのはほとんど75歳以上にはなっている。息子を社長にしている会社もあるがやはり実権はその親がにぎっている。一方、多くというよりすべての運転手はスマホやタブレットを持っている。会社幹部に聞かれては不味い情報はダンプ無線では語らないようになっていた、それはダンプ協同組合が分裂したことで運転手まで神経をピリピリさせていたからだ。

それともう一つは団塊の世代の運転手が70歳前後でそのダンプ会社を解雇になったり、下請けグループから排除、差別されたら生きてはいけないからだ。もちろん年金はもらってはいるがそのすべてといいほど国民年金しかかけてはいなかった。2003年ごろからは営業ナンバーが増えて会社組織になり厚生年金に変更したりもしているがその数はかなり少ない。それもたとえ掛けていても年金額は月に直すと生活保護者よりも少なかった。その年金では生活ができないから70歳を超えてもなんとかダンプ稼業にしがみつかなければならない事情も理絵社長は理解していた。

永年この日本を造ってきたダンプ運転手が40～45年も働いた老後が月々6万円前後しか年金をもらえないのは政府の責任というよりこの日本のダンプ業界の責任だと理絵社長は思っていた。組織が分裂する、これはそんなにいいことではない。しかも、その組織から脱退したのは理絵のほうだった。それが原因であんなに楽しかったダンプ仲間の無線が今では冷たい業務無線になっていた。

（その23につづく）

その２３ 理絵、京都府営業ダンプ協会の会長に選出

このダンプ協会の分裂には大手のゼネコンも感心を持っていた。それはどちらに加担しても一方だけのダンプの台数だけでは足らなかった。それに運転手の高齢化でこの先ダンプという車両はあっても運転手不足は目に見えている。今までだったら協会の垣根がなくダンプを効率よく配車できていた。ダンプの元受も複数の現場で仲良くダンプを融通していたからこそ工事も工程通り進んでいた。

この分裂で双方ともダンプの稼働率は２０％ほど減っていた。そしてその間隙を狙って運賃をダンピングした他県のダンプが出稼ぎにきている。これらはダンプの手配師と呼ばれている者から配車を受けているが、これらの手配師のバックには暴力団の影もある。この手配料というのはたとえば中小工務店からダンプ１日貸切４００００円で受けてここから１万円以上をピンハネして儲けるという輩になる。つまり、電話一本で１万円も儲かりこれを日に３０台手配すれば３０万円、月に１０００万円も儲かるという古典的な仕事になる。そしてこれが暴力団の資金源になると京都府警も神経を尖らせていた。

京都市内や国道１号線、２４号線、１７１号線、９号線には島根、鳥取、山口、広島、徳島、高知という白ナンバーのダンプが我が物顔で爆走していた。理絵の田中建設ら９社の下請けダンプも仕事は減ってはいたが、それを仲良く分け合っていたのでそんなに運転手の収入は減ってはいない。そればかりかこの期間に社員の研修旅行と称した温泉旅行をしていた。そして社員や下請け運転手の健康診断を全員京都建設関係保険組合の協力で受けていた。

これは理絵ら女子力の大作戦で男のメンツの戦争などしているよりこの暇な時期に社員旅行、健康診断、ダンプの修理、点検をしようと訴えていた。しかし、一方のダンプ協会の運転手、それに下請けも親会社からなんの説明も手当てもなかったから不満は頂点に達して爆発していた。そしてある運転手が酒に酔って自分のところの社長を包丁で刺すという事件が起きていた。これを機会に京都府警は両ダンプ協会に介入してきて双方和解のテーブルに着けと半ば強制的に命令をしてきた。

その結果、リーダー的な存在の前田運送の社長で「京都営業ダンプ協会」の会長が引退して両協会は再び一つとなった。そのあくる日から他府県のダンプは京都府から一斉に消えていた。こうして合併した「京都府営業ダンプ協会」の理事会で「個人ダンプ事業」を認め、その個人ダンプ事業者を会員にすることを満場一致で決議されていた。そして新会長には里井理絵がこれもまた満場一致で選任されていた。

個人ダンプ事業申請用紙は１０月の末までにこれを希望する運転手にすべて渡っていた。この用紙の書き方などは「京都府ダンプ協会」「田中建設」「愛企画」のＨＰなどで詳しく説明され

ている。美樹が考えた「仮免許」制度のおかげで申請用紙には駐車場と事務所兼休憩所の見取り図や賃貸契約などは免許試験に合格した後の「本免許」を取得する時までまずは必要がなかった。

つまり、資格書類審査だけだったが、これにも問題があった。それは過去1年間の輸送トン数、運賃実績と今後1年間の輸送トン数、運賃見通しの書類だった。この田中建設や青ナンバーの会社からの下請けであればコンピューターですぐにできるが、砂利販売業を隠れ蓑にしているダンプは井勘定で輸送トン数などは把握できなかった。というより10トン車に20トンも積んだことをそのまま書けば過去に悪質な重量オーバーをしていたことになりこれは社会的一般常識から見ても書類審査は通らないことになる。

とはいっても10トン分だけの運賃を書けばこれでは健全な経営はできないという理由でこれもまた却下されることになる。また手配師からの仕事も発注先がどこの会社なのかはまったく不明で書けない。また闇営業ダンプ会社で下請けをしていたダンプ業者は1日×日数＝60万円の明細書ぐらいしか提出はできなかった。

税務署に提出する書類なら収支の金額だけでいいが、なにせ相手は国土交通省の近畿運輸局としては輸送実績というのを譲ろうとはしなかった。そこで理絵らはまた主要メンバーを集めて会議していた。みんなそれぞれ、

「貸切なら1日に10トン車で5回走って50トン、走行距離は100キロ、運賃は平均40000円、昨年1年間のトンキロ数はこれだけ、去年1年で1100万円の運賃で来年もこの程度の見通しと書けるが...」

「それなら儲かるよ～私もしたいわ～」

「問題はトン数と運賃になるが、トン数は不明だが、絶対に重量オーバーはしていませんし今後も絶対しませんという誓約書を書いて申請書に添付したら？」

「そうね～運賃は家計簿などを参考書類として提出する方法もあるが...」

「それと燃料の請求書、車検、保険代などの必要経費を参考書類として提出すれば...」

結局のところ当局のお情けにすぎるしかなかった。そこで理絵はこれらに該当するものはありとあらゆる参考書類を提出して運転手の努力を認めさすという作戦になった。そのことを近畿運輸局との会議で理絵社長が遠慮がちに持ち出すと、近畿運輸局長は、

「理絵社長、京都府営業ダンプ協会の会長就任おめでとうございます。その祝儀してはなんだが、今回は最初の年としてそれを認めます。しかし、次回からは1年間の輸送実績、トンキロ数及び運賃の書類がなければ絶対に書類審査は通りません」

「局長、ありがとうございます」

11月1日から個人ダンプ事業の申請は始まるが、理絵ダンプ協会理事長は念には念を入れる

とその申請の書類の予備審査を協会がしていた。京都府の北部の者は郵送で京都市内のものは本人が書類を持ち込むというものだ。そして京都市内の中小企業会館の会議室を土、日の2日間借りて行政書士3名が目を通してパスした書類は封筒に入れて封をして協会が保存して近畿運輸局に一斉に提出する予定になっていた。

このダンプ協会から予備審査を受けたということそのものが信用性があって近畿運輸局がそんなに厳しく目を通さないようにという理絵のまじないのようなものだが、それが効果があるかはまだわかっていない。その書類に不備があるものが続出してそれを行政書士がいちいち説明しているが、なんとか239名の書類が揃ったことをこれもHPで流していた。残念ながら10数名は交通免許経歴書、それと暴力団構成員ではないという誓約書の提出を拒んだために予備審査は通らなかった。

（その24話につづく）

理絵は協会独自の事前審査に受かった239名の「個人ダンプ事業申請書」を持って近畿運輸局の輸送課長に手渡していた。輸送課長は、

「なんでも事前審査をされたそうで、それはこちらでも大助かりになります」

「なんせ最初の申請ですからすべて完璧とはいきません。この教訓がありますからダンプの個人業者は協会が製作した日報を毎日書くようにしています。これは2枚複写で1枚は協会に提出していただき全体の資料にします」

「それはそれは、それでこの預かった申請書類の審査の結果は12月の初旬に発表いたします」

それと同時に学科試験の講習会予定が決まっていた。それによると場所は京都陸運支局の自動車会館で12月の第1日曜日、第2日曜日、第3日曜日の午前は京都府自動車教習所の教官が講師、午後は京都府総務課の職員による「一般常識&時事」の合計6回になるが、それはそれぞれ定員が100名の予約制とした。つまり、午前は交通法規、午後は「一般常識&時事」の講習会になり、自由に講義を選べるようになっていた。そして絵里奈手作りの模擬試験の時間もあった。

2018年12月5日に個人ダンプ事業者申請の資格審査の結果が発表されていた。京都府ダンプ協会からの申請者239名はすべて合格、そして郡部の運送会社からの推薦申請者の5名も合格した。

2019年1月10日の学科試験はこれも自動車会館で開催されてこの244名が「仮免許」の合格者となり「本免許」のための申請の用意をしていた。これは車庫と事務所兼休憩所と荷主の「推薦」があればただちに白ナンバーを返上して青ナンバーの交付が受けられるようになっていた。この青ナンバー交付の一番はかねてから用意していた愛企画の下請けの男3人組だった。

この青ナンバー交付のセレモニーを新聞やテレビが取材にきていた。まずダンプの白トラという由縁になった白のナンバーを返上して陸事の職員から車検証とともに青ナンバーが手渡され、その青ナンバーを運転手がネジで取り付けてそれを陸事職員が封印するまでだった。それと同時にこれらを応援しにきていた理絵社長ら約30名は歓声を挙げていた。

その夜のNHK特集では「戦後の復興から個人ダンプ事業免許までの歴史」を紹介していた。理絵がこの世界に入ったのは2009年でまだ10年しかたっていない。それ以前、戦後から2009年までのダンプの歴史はまったく知らない。そのまったく知らない歴史を無視して理絵の一般感覚をいわば女子力で無理矢理通してきたことがダンプ業界に新たな女性目線の風を吹かしたと番組は取りまとめていた。理絵へのインタビューでは「40年も50年も働いてきたのに年金が6万円でしかない現実をなんとかしたいと思った」と語っている。

京都府建設共同組合では一次下請けのダンプは原則自動車運送業者（青ナンバー）のみとしていた。二次下請け、孫受けについては2022年4月以後は一切現場に入れないということを決定していた。まだそれまで3年は猶予があったが、現実には「個人ダンプ申請中」「運送業申請中〇〇協同組合」の看板を付けたダンプを優先するように現場に指示をしていた。

これはどの建設業界の各現業職もそうだが、近い将来ダンプの運転手や職人の不足で工事そのものができなくなる恐れが現実的になってきたからだ。理絵社長がいう日当、日給の世界からサラリーマン並みに月給とボーナス、それに各種保険、有給、退職金も完備しなければ若者への就職のアピールもできない。それにはどの職種も共存共栄して儲けなければならないのは誰でもわかる。

下請けを泣かして儲ける手法より京都ではまず下請けの単価を統一してそれ以外で競争するという京都方式を決めていた。その一つとしてダンプの運賃も統一されるようになってきた。そうすると質の悪いダンプ会社とその運転手はトコロテンのごとく良質なダンプ会社に押し出されて退場しなければなかった。

実はこの方式は2002年からの規制緩和でタクシー、バスに試されていた。ところが新規参入してくるタクシー会社、バス会社は増えたが、悪質な経営者のみ増えて、このトコロテン機能が働かず運賃値下げ競争になって運転手の賃金は低下することになった。さらに、悲惨な観光バス事故が続いていた。理絵社長はこのことが頭にあり、個人ダンプ事業者及び青ナンバーを増やしても運賃競争だけは絶対しないと考えていた。

このダンプの運転手より観光バスの運転手のほうが華やかには見えるが、国土交通省が決めた正規のバス運賃より8～9万円もダンピングして走っている。もちろんかつてはダンプ業界もそうだった。その不正なダンピングを許しているのはそのバス業界の協会である全日本バス協会の責任だと理絵は訴えていた。しかしながら、この訴えはバスとしているが、京都以外の他府県のそれぞれのダンプ協会を徹底大批判をしているのと同じだった。

（25話につづく）

この長編小説を紙の本にしていただける出版社を募集しています。

2015年から急激に運輸、建設業から高齢を理由に退職者が増えてきた。京都の老舗タクシーの明星タクシー、京聯自動車の2社が人手不足から倒産している。この京聯タクシーはタクシー一台数が約200両あったが、このタクシーというのは1台のタクシーに2名の運転手が交代で乗務する、つまり、200台のタクシーがあればその倍の400名の運転手が必要になる。しかし、この会社には150名しか運転手はいなかったので40%の75台は稼働するが残りの60%の125台は青ナンバーをつけたまま遊んでいた。

個人タクシーも最盛期は2500台営業していたが、2019年には1500台まで減っている。その走っている個人タクシーの約80%は70代の運転手だった。この2015～2019年までに6社のタクシー会社が廃業、倒産していた。そのすべてが運転手不足が原因だった。運輸、建設業に若い人、それに女性が進出してきているが、高齢で退職する人数に追いつかなかった。

その昔、理絵、絵里奈、美樹の時代は普通免許さえあれば5トントラックまでは乗れた。したがって4トンダンプにも気楽にトラバークユーして4トンデビューを果たしていた。ところが2007年からは普通免許では3トントラックまでしか乗れなくなった。この2007年に18才の人は29～30才になっている。つまり、28才以下の若者は4トンダンプに乗ろうと思ったら中型免許を取得しなければならない。

このダンプ業界に足を踏み入れる多くの人のキッカケとは、会社が倒産したり、失業の人が普通免許で4トンに乗れるという気楽さからだった。中にはさらに収入が多い大型ダンプにステージをアップしてそのまま居つくのがほとんどだった。つまり、一般の人とダンプの運転手には垣根がなくすぐにでもダンプ運転手になれた、それが大型ダンプ運転手の養成でもあったのだ。

ところが28歳以下の若者がダンプに乗らなければならない境遇になってもすぐに乗れない大きな壁があった。それが中型免許制度になる。この中型免許を取得しようと思えば18才で普通免許、そして2年の経験の20才以上で試験を受けられる。これを自動車教習場で受ければ「普通免許AT所持」で約22万円の金がかかる。一般的には普通免許しかいないからなにかの理由で4トンダンプに乗ろうと思ってもすぐには乗れなくなっていた。しかも中型ダンプの教習場は京都では1ヵ所しかなかった。

京都市の街中の道路はほとんど一方通行の狭い道だ。その街中にも11階建ての大きなマンションも建設されているが、これらの工事車両のダンプ、生コンミキサーカーもすべて4トンになっている。各種の現場に出入りする業者、電気工事、ガス工事、水道、各設備のトラックも2～

3トンに小型化されてきた。それは28才以下の若者の普通免許では3トンまでしか乗れなくなっているからだ。さりとて運送業でもないので会社の金で中型免許を取得させるほど余裕のある下請け業者は皆無になる。

また大手の宅急便のトラックも2～3トンが主流になっている。これらのトラック運転手がなにかの理由で退職した場合などによく4トンダンプに流れてきたことがいままでのダンプの歴史になるが、これも中型免許で無くなってしまった。つまり、4トンダンプ経由大型ダンプ運転手の養成システムがなくなったのです。

理絵社長は考えていた。28才以下の普通AM免許の女性を雇用する。そして会社の経費で中型免許を取得させて4トンダンプで1年の修行。そしてこれも会社の経費で大型免許を取得させて大型ダンプデビューとなるが...これも途中で辞められても労働者に免許取得の経費などは請求できない。理絵が10年前にダンプに乗った時の時代とはまた違う女性の生き方になっていた。それは京都府の最低賃金が1000円になり、スーパーのレジ係りの平均時給は1150円。当時のコンビニの店員の時給が750円の時代では4トンダンプの日給8000円は高額だったが、今でも4トンの運転手の日給は9000円～10000円（時給1125円～1250円）ではそのような魅力はなかったからだ。

ここにもやはりダンプ運賃の安さが影響していた。理絵はとりあえず2007年以前に普通免許を取った人で免許証に「中型車は（8トン）に限る」と書いてある女性の運転手を大募集していた。理絵の田中建設はまだまだ若い女性で人手不足はそんなに深刻ではなかったが、同じクラスの「前田建設」では自社保有大型ダンプの40台のうち20台のダンプに専属運転手がいなかった。これは高齢化で運転手が退職してしまったことが原因だが、そこで前田社長はアチコチの退職運転手をアルバイトとして使っていた。また運転手組合から派遣の運転手を派遣してもらっていたが、いずれにしても忙しいときはどこも同じで1日1人雇用すれば約20000円～23000円と相場は高くなっていた。下請けのダンプ運転手もこれも高齢化で環境はまったく同じで元受からの要請には「明日病院の検査に行く」とか「入院した」との理由で週に3日ほどしかダンプを稼働させなかった。

一方の65歳以下の運転手で個人ダンプ事業者や青ナンバーの運送業を目指している人にとってはこの人手不足でかなり忙しくなっている。工事現場も人手不足は同じで第1土曜日、第3土曜日は原則工事は休みだが、これを返上しなければ工期に間に合わなかった。

東京オリンピックまで後1年、この1年を乗り切ったら建設の仕事はかなり減る予定と見込んでいたが、この1年を待たずして大型ダンプ10台を保有していた中山建材が運転手不足で廃業していた。この中山建材は西京区の大枝にあり会社の広大な敷地に砂、砂利、碎石の置き場があり中小工務店の工事現場へ自社のダンプで運んでいた。

その昔は京都縦貫道の工事で儲かってはいたが、それが開通してからは大型ダンプでの輸送が減り続け京都市内への輸送が主力になった。しかし、京都市内は道路が狭く大型での輸送は無理になる。そこで4トンダンプに切り替えようとしたが、大型のダンプ運転手が小型の運転を嫌がり集団で退職していた。急遽、4トンダンプ運転手を大募集したが、1人の面接もなかった。これも中型免許制度の弊害だと里井理絵京都営業ダンプ協会の会長は思っていた。

(26話につづく)



中山建材の社長は５０歳で理絵より１０歳年上になる。元々、中山の親は柿と栗の農園をしていたが、その柿も栗も寿命を迎え植え替えを与儀されたが、それは莫大な金と収穫するまでの時間が長かった。そんな折、京都縦貫道の計画があり中山はダンプ業者になった。２００２年の規制緩和で運送業登録していたから京都府でも古株の青ナンバーの業者だった。

京都縦貫道の工事が始まると大手ゼネコンから当時遊んでいた農園を砂、砂利、残土の仮置き場に貸してほしいという申し入れがあった。もちろんこの資材を輸送するのは中山のダンプだったからこれは儲かっていた。そして工事が終わってからはそのまま資材の販売をしていた。この中山が絵里社長に、

「絵里社長、この１０台のダンプと運送業の権利を譲渡する先を探してほしい」

「それは～運転手さん込みならなんとかなるが…」

「うちの運転手さんはもう開業当時から２０年、そう全員１人も辞めなかったからつい安心してた」

「運転手さんの年は？」

「そら～もう７０歳近くになっている…」

「それなら呼び戻しても無理ネ～！」

理絵は中山に一つの提案をしていた。それはこの１０台のダンプを売って、それで１０台の４トンダンプを買って京都市内の工事現場に砂利を販売する。ここまでは中山の計画だったが、理絵はその４トンダンプにＧＰＳ無線を搭載してタクシーのように現場から残土１台でたとえば搬入先が２０キロ以内なら４０００円、というようにスポット輸送の仕事を取って配車するの。市内の現場はそんなに大きくないから４トンダンプを１日チャーターする必要もないが、１日に１～３回は４トンダンプが必要になる場合もある。つまり、京都市内に常時１０台のダンプがあり、ダンプの要請があればＧＰＳで一番近いダンプが現場に急行するシステムになる。

中山は、

「そうか～砂利販売だけならこの大枝から市内まで配達してまた帰ってくるが、そのままスポットの仕事があれば次々渡り鳥のように稼げる。それにスポットの依頼があればその現場からも必然的に砂利の注文もいただける、一石二鳥だが…」

「そう、その４トンの運転手さんが集まらない、しかし、このシステムで儲ければ、４トンの運転手さんの日給を現在の９０００～１００００円から、１２０００～１３０００円程度出せば時給も１５００～１６２５円と高額になる。が、これで経営できる？」

「いやいや、元々、砂利販売だけでも１００００円の日給をだすつもりだった。仮に仮にダンプ１台に１日１回しかスポット輸送がなかったら４０００円の運賃があればそのまま日給に回しても損はない」

中山は25才で結婚して子供は2人いたが、30才のときに農園からダンプ業者への転向するというに妻の光恵は孟反対していた。その理由は、

「私は大枝の農園に嫁入りしてきたのです、そんな下品なダンプなんて恥ずかしくて表を歩けません。それに子供たちの教育にも悪い、私の両親も猛反対しています」

そして離婚したと理恵に話していた。理絵も、

「中山さん、私の夫も妹の絵里奈の元夫もそれに私たちの両親も同じ理由でダンプという仕事を忌み嫌っていました。その理由はやはり一般サラリーマンなら当たり前の月給制度、それにボーナス、各種社会保険、有給、退職金などがなかったために社会的地位がなかったからです。私はこれを改善したいと思っています」

こうして理絵と中山は新しい4トンダンプによるスポット輸送の計画を連日練っていた。理絵の実家、実家といっても理絵もその2人の子供と妹の美樹、それに両親も一緒に住んでいる。家はJR西大路駅近くで古いが大きな民家でそれぞれの部屋があった。中山は京都市内の工務店の現場を訪ねてはこの4トンダンプによるスポット輸送の説明をし歩いていた。そしてその帰りに理絵の実家で作戦を練っていた。理絵の母親は何を勘違いしたのか？理絵に、

「理絵、中山さんっていい人じゃないの！お付き合いしたら？」

「いい人って、中山さんはお母さんの嫌いなダンプの親方よ！」

「そらまあ～ね、でも、人をそんな仕事で判断してはいけないよ～理絵...それに理絵は京都のダンプの会長だから、私も鼻が高いは～」

中山の営業の成果は、

「理絵社長、それがけっこう4トンダンプのスポットの仕事があることがわかった。それに市内の現場は狭くて残土や産業廃棄物が出たらその日のうちに輸送してくれという話もあった。もちろん我が社の砂、砂利、碎石を配達したダンプに積み込んでほしいというものだ！」

「へえ～それなら往復運賃になる」

「そう、それと地下があるビルなどは残土をまた埋め戻しに使うからその土を保管してほしいという要望もあった。まあ～これは理論値だが、たとえば建材を買ってもらえて建材の代金と運賃、それに残土の輸送と保管料、そしてまた埋め戻しのための運賃と一石四鳥になる」

「それで4トンダンプの手配は？」

「ヤマト自動車京都販売がもう5台の中古車を整備、点検してくれている。それにGPSは15台分で400万円の契約をした」

「それで運転手さんは？」

「辞めた運転手を説得してこれも5名を確保している。日給は理絵社長が明示した13000円といえば喜んで他の仲間も誘うと約束してくれている。もちろんその金額でハローワークに求人を出している」

「そうね～１３０００円なら中型免許を取っても元が浮くね」

こうして中山建材は４トンダンプ５台、３トンダンプ、２トンダンプの７台で建材とスポット輸送の新しいシステムの仕事のスタートをしていた。運転手は５名だが、この２トン、３トンダンプというのは京都の狭い路地には必要なものでかなり人気になっていた。それに運転も普通免許で乗れるからすぐにハローワークの紹介で３０前後の若者の就職が決まっていた。

中山建材の朝は８時から７台のダンプに注文の砂、砂利、碎石を大型のシャベルで積み込むことから始まる。そしてその現場に配達するがその後の仕事もタブレットに記載されている。これは前日にスポット輸送の注文があった分だが、その日に急にスポットの依頼があればＧＰＳ無線で「５号車、それを降ろしたら〇〇建設の建売住宅の残土を積んで大枝本社へ」...こうして本社に戻ったダンプはまた注文の建材を積んで京都市内へと配達していた。この電話注文を受けたりＧＰＳ無線で配車するのはこの中山の娘で２３歳の紀子だったが、この紀子もダンプに乗りたいと夜はデルタ自動車教習場で中型免許を取得するために通っていた。この紀子も理絵社長の生き様に感動して理絵の弟子になりたいと申し入れていた。

理絵もこの中山建材が心配になるのかこの中山建材に砂利を輸送するダンプを自ら運転して昼休みには中山建材の運転手らとランチ、そして意見や要望を聞き取り、というより理絵や紀子のファンを増やして和気藹々の職場を作ろうと努力していた。もちろん２３歳の紀子もこの理絵の女子力を弟子として学習をしていた。

（その２７につづく）

２０１９年５月のころには京都近郊、南部だけで大型女性ダンプ運転手はもう１００名を超えていた。このダンプ業界には男女の賃金差別はなく月に２３日働いて約３５万円、それに早出、残業、年２回のボーナスで年収は５００万円ほどになっていた。しかし、それでも一般の労働者よりは年に１００万円も少なかった。

このダンプの女性にも夫もいるし子供もいる。その夫と子供らがダンプに乗りたいというのがかなり増えてきた。理絵がダンプに乗った１０年前には考えられないことが現実には起っていた。理絵の発案で「保育園完備・母子寮あり」を機会に建設業に入ってきた女性も再婚、そして子供らも成人している。その母親の生き方を背中で見っていたのか、やはり母親と同じ仕事をしたいというのが多かった。

そして再婚組や独身の女性の夫達もダンプや建設の仕事を理解して現場に入ってきている。さらに派遣業からのトラバークーもあり、この新人達の教習はやはりもうベテランの女性がしていたので現場では男が下っぱで女性が上司となる逆転現象が当たり前になっていた。

また現場では男女の恋愛が増えている。その昔、公務員同士の結婚が一番理想といわれた時代があった。それは公務員には賃金差別もなく福利厚生、退職金、年金まで厚遇すぎる厚遇だったからだ。理絵社長は現場同士の「現場婚」がもっと増えればいいと現場合コンまで推奨していた。仮に夫婦がダンプで働けば年収は１０００万円になる。これで保育園が完備していれば夫婦が働きすぐにでも一軒家やマンションが買える、そしてそれが現場の仕事を増やして停滞している日本の景気が良くなるという持論をＨＰで訴えていた。

ところがそのＨＰの掲示板には、
「理絵社長殿、たしかにその通りだが、それを推奨している肝心要の理絵社長は独身だと聞くと、それでは訴えとの整合性が合わないと思うが？いかがか？」
これには理絵も美樹も笑った。そして見る見る間に「いいね！」が押されて１時間に７００回にもなった。そこで理絵は反論として、
「いえ、その合コンを提案した理由は私自身も参加して素敵な現場男子をゲットするつもりですから整合性はあります（笑）」

この理絵が合コンに参加するという声明から急激に現場では現場合コンのセットがされるようになり理絵社長と美樹常務、それに愛企画の愛子とその女性ダンプ運転手に出席の要請が毎土曜日の夜にきていた。この現場にはありとあらゆる職種の人々が集まっている。もちろん合コンを企画する会社の社員もいたからこの話は新幹線のものより早く企画されていた。

中山建材の中山謙一社長も娘の紀子から勧められて理絵社長が出席する現場合コンに初めて出席の予定をしていた。この合コンは「30代以上の再婚コース」という名称で男女とも30名の定員となっていた。これもHPで募集されたが、早いもの順というルールだから、中山は指定の時間にはパソコンとにらめっこをしていた。その結果中山も無事出席の権利を確保していた。

理絵が参加した会場は新都ホテルの宴会場でカラオケも用意されていた。元プロの司会者で現在は左官工をしている佐藤が出席者のプロフィールを紹介している。理絵は会場で中山を見つけていたが、それより前に娘の紀子からメールがあった。それは「お父さんをよろしくお願いします」だった。

会場の雰囲気盛り上げるのはもう現場女子のベテランになっていた女性達で、そのバリバリの化粧とセクシーな衣装で合コンというより祇園の高級クラブという雰囲気だった。一方の男性達はまだまだ現場男子で社交性はまったくゼロだった、というより女性に遊ばれていた。その1人に中山もいたが、理絵は積極的にカラオケを誘ったりしていた。司会者が配ったカードに気に入った女性、男性の番号を書くのだが、そしてピッタリ一致した組だけ紹介されていた。それは3組で最後の組は「京都府営業ダンプ協会会長里井理絵さん...中山建材社長中山謙一さん」だった。そしてその様子はスマホから動画で流されていた。

それと同時に各マスコミも「現場合コン、女子にたじたじの現場男、男の現場を女性が乗取る」という見出しで記事は「京都府営業ダンプ協会の女性会長の企画が実る、男臭い現場が華麗なる現場への第一歩となった」と10年前の現場と比較する記事が多かった。

この合コンを機会に理絵と中山はデートを重ねていた。お互いバツイチ同士の大人だから誰にも遠慮はいらなかったが、やはり京都府営業ダンプ協会の会長でもあり、それに度々「美人すぎる現場女子」などテレビ、新聞などで紹介されてもう文化人扱いになっているということで女性週刊誌、週刊文春などがこの2人を尾行していた。

理絵にすれば女子力+マスコミの力を借りてここまでになったのだから、これらの突撃取材にも笑顔で応えていた。その記事の内容も理絵にはかなり好意的でやはり「ダンプ女子の恋」とか「アラフォーの星」というものが多かった。その記事のおかげで4トンダンプに乗るために中型免許を取得する若い女性が増えていた。

これは理絵の恋人と紹介されている中山建材もそうで小型ダンプ7台で始めた新事業も大成功して新たに8台の合計15台、それに見合うダンプ運転手を確保していた。この時代は人材を確保できる能力がある経営者が成功するという社会になってはいたが、これに気がつく経営者はまだまだ少なかった。

(28話につづく)

私へのEメールは、kyotoinari@sofutobank.jp

その２８ 京都の職人が東京オリンピックの選手村を建設

２０２０年７月の東京オリンピック関係の工事進捗率は予定の８５％より８％も低く７７％だった。大手のゼネコンは危機感を持って全国の職人を東京に派遣せよと大号令をかけていた。この現業員の宿舎にアパホテルなどビジネスホテルを全館貸しきるゼネコンも出てきた。

この京都でもなんとか東京オリンピックを成功させようと男の職人をピックアップして東京に派遣していた。ダンプの運転手もそうだが、これはダンプを東京に持ち込むのではなく東京、関東方面も運転手不足でダンプが遊んでいるので運転手のみを派遣していた。その日給も主張手当て込みで３万円と跳ね上がっていたが、それでも手を上げる京都の運転手も職人もは少なかった。

その理由は色々あるが、やはり１３００年の都というプライドがあって応援とはいいがこれは「出稼ぎ」だと思っていた。その昔、冬場には東北や北陸から当時の言葉で人夫が工事現場に出稼ぎに来ていた。もちろんダンプ運転手もそうだ、汚い飯場で酒を飲む姿がもう４０年も経つが頭から離れていなかった。現在はビジネスホテルだと高給で誘われても京都人としては「なんでワシが出稼ぎにいかなあかんねん」と断っていた。大手のゼネコンの監督は本社からの要請に何とか応えようと電気工のＡさんに、

「Ａさん、１ヶ月でいいから出稼ぎではなく主張してほしい...」

「監督、そら～俺も日本人だから東京オリンピックは成功してほしい。しかし、それは東京の問題で都が東京に遷都された時、京都の人口は三分の一になって経済が破綻するほど落ち込んでいた。その時、東京の人間は京都に何をしてくれた？その困難な時でも俺の祖父は歯を食いしばって現在の京都にした」

「せ、せ、せ、遷都？...そんなことを京都の人は根にもっているのか？」

「監督は京都の人間と違うからこれは分からないと思うが、俺らの家は水飲み百姓の貧乏人だが、京都人の誇りは捨てたくない、なんで京都の人間が東京に「出稼ぎ」に行くのか俺は理解できない」

「京都の人はみんなそう思っているのか？」

「そら～だから３食食事付きのホテルでもそれは飯場だ！、日当３万円でも５万円でも誰も行かない、それが証拠だ！」

理絵社長も知り合いの電気工に声を掛けていた。

「Ｂさん、たしか～東日本大震災ではボランティアで福島の小さな町に...」

「はい、１ヶ月の予定だったが、俺がこのまま京都に帰ればこの被災現場には電気工がいなくて電気が点かない、そこで見るに見かねて２ヶ月もいた」

「それなら出張になれているから、どう？オリンピックの応援は？」

「いや、理絵社長がボランティアに行けというなら俺は明日にでも行く、しかし、出稼ぎは...」

「出稼ぎという悪いイメージがあるの？」

「いや、それは違う、なんていうか～職人のプライドとして東京の職人から京都から出稼ぎに来たと思われてたら腹が立つ！、俺らは札束で頼っぺたを張られて動く人間ではない」

理絵は考えていた。つまり、京都の職人というのは日当の金額を先に示されてそれに釣られて動く奴は最低の人間だということが頭にあるという人間性と理絵流に判断していた。そこで理絵は妹の旦那で大手ゼネコンの菅原と相談していた。菅原は菅原が所属している大栄建設が受注している選手村の集合住宅があるが、これはまだ基礎工事でだけで上はまったく手がついていない。この1棟を丸々京都の職人で建設したらどうかという提案をしてきた。

理絵はそれなら出稼ぎでも応援でもない。まったくの京都の職人が作った選手村になる。この1棟を予定した東京の職人のすべては他の工事にスイッチすれば京都から延べ数100名の応援部隊とまったく同じになる。そして工事現場の看板には「施工・大栄建設京都営業所」と書けば京都の職人のメンツも立つ。

そしてこの工事の監督は菅原とすればもう京都の職人は誰も文句はいわない！、この理絵と菅原の大作戦は見事に大当たりして京都から各職種の必要人数だけすぐに集まった。もちろん宿舍はアパホテル、3食付で特別日給は3万円だった。これも珍しい京都方式として各マスコミは「京都の職人が東京オリンピックを応援、選手村1棟建設」という見出しで工事現場の看板の「施工・大栄建設京都営業所・選手村工事」を1日に何回も放映していた。

理絵も京都人だった。日本人がオリンピックの日の丸をみて感動するように京都人も東京の工事現場の看板「施工・京都」を見て感動する。電気工がいった、「札束で頼っぺたを張られても動かない」、日本という小さな国だが、この日本の中にも国というのがある。これが色濃く残っているのが京都の文化だと関心していた。

京都から男の職人が東京オリンピックの選手村の建設に行ったが、その分、京都の現場は忙しくなっていた。菅原建設の現場ではこの時期約半分が女性の職人になっている。そしてその女性職人らと同じ年の男の見習いも各職種に増えているから、力仕事は男の見習いに任している分、作業は早く進むシステムになっていた。

政府がいう職場に30%の女性の上司という目標はあるが、この京都の建設現場はもう約50%が女性の上司になっていた。この夏休みにも高校生現場体験の予定が入っていた。これは去年からで去年は夏休みの1ヶ月間で男子生徒50名、女子生徒25名が3日に分かれて、現場体験学習をしている。そしてその生徒が卒業した今年の4月からは各職種にその現場体験した生徒のうち28名が就職していた。

その就職した生徒を冷やかしか？応援かはわからないが、その後輩たちが現場体験学習にきていたので先輩らはかなり緊張して働いていた。今年の生徒の数は少し増えて総勢90名で5日に分けていた。その案内役が鉄筋工の安藤由佳でまだ生徒から見れば28才のお姉さんだった。この由佳も週刊誌のグラビア企画の「美人すぎる現場女子」の今年のチャンピオンだったから特に男子生徒は真剣に由佳の話を聞いていた。

そして昼になり女子生徒は女子休憩所、男子生徒は男子休憩所で現場提供の仕出しの弁当を食べていた。この時に直接現場女子、現場男子に直接現場の話を聞ける時間になっている。女子生徒は現場から戻ってきた若い女性に注目をしているが、それがヘルメットを脱ぐとそこにはお洒落な髪型と綺麗に化粧した顔があったのでそれ瞬間に工事現場という暗いイメージはどこかに飛んでいた。1年前に配管工で就職した1年先輩の女子生徒も随分凛々しくなっていたが、この後輩らを見つけた瞬間に元の高校生の笑顔に戻っていた。

一方の男子生徒はタワークレーンやとび職の職人に質問が集中していた。ある生徒は、「あんな高いところに上れるうになるには何年かかりますか？」
「いや～そんなんすぐに上れる。なんなら昼から希望者は俺が案内するからこのビルの11階にまで上る」
「怖い～～～」
「いやいや、ほらこの安全ベルトを着ければ絶対に転落はしない」

こうして午後は希望の職種にチャレンジできることもあった。特に女子生徒は田中建設のピンクの大型ダンプに興味があるのか大人気だった。もちろん運転手はこれも「美人すぎるダンプ女子」の初代チャンピオンの美樹だった。これは2名を乗せて20分ほど走るコースで3回X6名をジャイケンで決めていた。実際に残土を積んで現場からでて仮置き場に降ろす工程もあった。そしてこれらの生徒はスマホで動画を撮影して全国の同じ高校生に発信していたから、理絵社長発案の「高校生現場1日体験」は全国に広がっていた。
(その29につづく)

私への連絡は kyotoinari@softbank.ne.jp

元々、一匹狼だったダンプの下請け業者も２０２２年４月からの白トラ、闇運送業の違法摘発でなんらかの協同組合に加盟しなければならなかった。ここに加盟しない業者は高齢でこれを機会に廃業する予定になっていた。

宇治、城陽ダンプ協同組合の組合員は４０名になっていたが、そのうち１０名が資本を出し合って貨物運送業の申請をしていた。資本といっても各自のダンプを査定してその金額が出資金になるので各自そんなに負担はなかった。都会ではこのダンプ１０台の車庫を探すのもガレージ台も高くつくが、なにせ田舎だから山林を安く借りて整地すれば車庫は確保できる。事務所兼休憩所も工事現場のプレハブで許可はすぐに認められる。

問題は社長を誰にするかでかなりもめていた。これは釣クラブや写真クラブの会長を決めるような簡単なものではない。いずれ会社が儲かり大きくなったらその社長の権限というのは果てしないものがある。それが田中建設、愛企画という現実到大成功した会社が目の前にあるのだから男たちにすれば平社員になるのか？社長になるのかを命がけで戦っていた。

そうなると自然と派閥ができる。ある運転手は、
「ワシが社長になったら君が専務で君は常務にする、だからワシを社長してほしい」というデマか本当かはわからないが怪情報が乱れ飛んでいた。そもそも、これらに協同組合を作れ、また仕事を斡旋してきたのは地元の愛企画と淀の田中建設だった。

こんなことで男は喧嘩するのかと愛子も理絵もあきれかえっていた。社長といってもみんなと同じ仕事をする、そして売り上げごとに分配する企業内個人ダンプ事業となんら変わらない。しかし、やはり牛の尻尾より、鶏の頭という考えは古くから男たちの頭にはあった。そこで愛子はダンプの査定はしないで各自資本金をいくら出せるかと聞いていた。これにも社長になるためなら家を担保に入れて借金するというものまででてきた。そして、それを支持する家族、親戚まででてきたものだからもはや收拾はできないと愛子はさじを投げていた。

一方で協同組合にさえ加盟していれば２０２２年度以後も白トラとして検挙されないのではないかという空気が漂ってきた。それは戦後もう７５年間も白トラの取締りを見逃してくれていたのだから今後もそれは続くという根拠のない噂だった。

そんな折、愛企画の女性運転手の美幸が同窓会の二次会の祇園のスナックで青ナンバーの申請をしている宇治、城陽のメンバーで執拗に社長になりたいと工作している吉永智之という男がいたという。その吉永と同席していた客は一目で暴力団とわかる人物で宇治で時々見る顔だともいっていた。その話を元に愛子はその男の素性を調べたらこれは案外簡単にわかった。その男は警

察に解散させられいた暴力団のフロント企業の坂口興産の社長だった。理絵と愛子はすぐにその吉永智之を捕まえていた。

そして愛企画の事務所で、愛子が吉永に、
「あんた、坂口興産の社長と何を企んでいるの？」
「いや～俺はなににも知らない...」
「知らないって、毎日毎晩、運転手を焼肉やスナックに連れていっているが、あんたの収入は日報を見ればすぐにわかる。そんな金のすべては坂口の社長からでているのか？」
「.....」
「あんたも暴力団が絡んだ会社はすぐに摘発されるのを知っているでしょう。坂口興産は青ナンバーの運送会社を喉から手がでるほどほしがっている」
「いや～坂口さんが、俺を社長にしてくれるというので...」
「そう、それなら近畿運輸局にこの「宇治城陽運送」の申請を受理しないでほしいと京都府営業ダンプ協会として意見書を出します」
「そんな～」

こうして吉永は宇治、城陽ダンプ協同組合からも除名されていた。もちろん宇治城陽運送の申請も空中分解していたが、理絵はまだ男の世界には「雲助根性」というのが色濃く残っているのかと歎いていた。

一方で「個人ダンプ事業」のほうは仮免許に受かった244名のうち105名が本免許に受かり青ナンバーで営業していた。理絵の田中建設推薦の個人ダンプ事業者も15名が営業していた。稼働率も土、日を除いた平日では95%を超えてほぼ毎日仕事があり青ナンバー優先の工事現場も増えていた。このころから次の11月申請、2020年1月試験の個人ダンプ事業への問い合わせがダンプ協会の事務局に増えてきた。

これは貨物運送業の申請でなにかともめるより個人がいいという考えからだった。この宇治城陽運送の事件の影響はこんなところにもでていた。そこで理絵社長は社長の席の取り合いでダンプ運転手の団結が乱れない方法はないかと考えていた。そこで理絵は新しい会社の株の100%を田中建設と愛企画が持ち、社長を決めるのは筆頭株主が決めるという案をだしていた。そして持ち寄ったダンプは査定額を決めて会社が月々支払うという案だったが、これも「これでは出資者でも経営者でもない、ただのダンプの雇われ運転手」と変わらないという意見が圧倒的だった。

理絵はいう「そもそも、この法人化というのは白トラ、闇営業の摘発から逃れるもので社長になりたい、経営者になりたいという目的ではなかった。もし、それが目的なら自分が資本と荷主を調達して社長になれば誰も文句はいわない」とHPで訴えていた。

これには様々な反論があった、Aさんは、
「新しい社長を決めるのはその出資者であるダンプの運転手が決めるのであって、それを決められない会社は設立しても何かともめるからダンプ協会は関与しなくてもいい」

Bさんは、

「社長になりたい人が先に手をあげて出資金も人より多くだす。その条件で7台集まれば青ナンバーを申請するのはどうか？」

Cさんは、

「元々、ダンプの運転手が社長になるという理絵社長の発想は甘い。たまたま成功した愛企画や理絵社長はバックに大栄建設がついていたからだ」

Dさんは、

「元々、法人化が目的でダンプ協同組合を作ったのだから、その組合長が社長になるのが筋だと思う」

Eさんは、

「これからも暴力団の息のかかった奴らが運送業の申請をするが、それを見破る方法はあるのか？、理絵社長はダンプの運転手を信用し過ぎる」」

こういう意見が100ほど届いたが、どれが正しいのか間違いなのかは理絵は判断をしていない。京都府内には50ほどの地域ダンプ協同組合があったが、青ナンバーを取得したのはたったまだ5社40台。この5社も元々白ナンバーの組織を協同組合化したものでリーダーは愛企画と同じで決まっていたからことは簡単だった。理絵は3人寄れば文殊の知恵、7人寄れば烏合の衆かこの法人化の難しさを改めて知った。

(30話につづく)

現場合コンの様子をスマホやタブレットで見ていた現場男子のほとんどがカルチャーショックを受けていた。それは日ごろ一緒に働いている女性の鉄筋工やパワーシャベルの運転手、それにダンプの運転手にガードマンまでが綺麗に着飾って歌はもちろんダンスまで披露していたからだ。一方の現場男子はそれなりのお洒落をしているがダサイ...ダンスもできない。トークは完全に女性に負けている。

そもそも現場男子というのは宴会といえば「焼肉」などのＢＢＱでそれも作業着を着たままカラオケスナックとお洒落には縁がなかった。話すことといえば仕事の話か阪神タイガースに競馬しかなかった、それでは綺麗な現場女子に到底相手にはしてもらえない。そこでこの合コンの動画を観たことから現場男子もそろそろお洒落の必要性に気がついてきたようだった。

田中建設の女性ダンプ運転手に大柄の奈津子という女性がいるが、噂ではこの奈津子は元プロのフラメンコダンサーだという。そしてダンス教室もやっていたそうで離婚を気に４トン、そして大型ダンプの運転手になっていた。理絵の家の近く、ＪＲ西大路駅近くに「カラオケ居酒屋 ポン吉」があるが、そこでこの奈津子と理絵、それに美樹が遊んでいた。

理絵は奈津子に、
「最近、現場男子があ合コンの影響でお洒落やダンス、それにトークを磨こうと努力しているらしいの...そう、あの中山さんも...」

奈津子は、
「へえ～中山さんて理絵社長の恋人の？」
「そう、娘の紀子さんと一緒によくデパートの紳士服売り場にっているらしいの」

理絵はこの居酒屋のマスターに日曜日の休みにここを貸してほしいといっている。その理由は現場男子のダンスとカラオケ、それにお洒落、トーク教室をしたいというものだ。このマスターも理絵の大ファンでこれを許可してくれたばかりか、俺はカラオケ係りになるともいってくれている。

こうして合コン前の男前教室が日曜日の昼間に開催されていた。ダンスの教師はもちろん奈津子で髪型、お洒落のセンスは絵里菜、美樹が受け持っている。この居酒屋「ポン吉」はテーブル席が４０席、それにフロアーが広くとってあり近所のワコール本社や日本新薬の社員の歓送迎会によく使われていた。男子は定員３０名で会費は料理、飲み物付きで１万円、その分、女性は男子のダンスのお相手をする条件付きで無料で１０名。これも田中建設のＨＰで予告、そして早いもの順になっている。

これは5分で出席者が決まり男子はお洒落な服装を買うためにイオンモールに行っていた。これはやはり30代、40代の男子が多くて学歴も高い現場監督、それに設計士、測量士が大半を占めている。ただこれは初めてのことであり、それこそ男のダンプ運転手や現業員は興味はあるがしり込みしていたが、これもスマホ、タブレット、パソコンで実況放送されるからそれぞれの家で目を皿のようにして観ていた。

女子にとっても現場でサラブレッドといわれている大手ゼネコンの若いエリート監督との出会を楽しみにしていたから、そら～気合が入っていた。しかし、これは合コンではなく現場男子の男前教室だと理絵社長は開会の挨拶でいってはいたが、どの女性も暴走気味にテンションをあげていた。それを観ていた現場男たちは自分が好きな女性と現場監督がダンスを踊っていることにやきもきしていた。

そしてその多くの現場男子が「よっしゃ～あんな青白い男たちに現場女性を取られない」と決意したかは定かではないが、みんなそれぞれにお洒落やダンスを勉強するようになっていた。理絵は「この日本の男どもが、女と同じようにお洒落に気を使うようになれば日本の経済も潤わす」という持論をHPで語っていた。

この男前教室は1回で終わっていたが、理絵が仕掛けたのは「現場男子よ酒ばっかし飲んでいなくてもっとしっかりしろ」と気合を入れたかったのだ。その後、色々な話によると現場男子のそのほとんどが家から現場へは自家用車、バイクで通勤しているが、すべて現場の仕事着のまま通勤していた。それが、ほぼ全員が現場の女性を気にしてか？この仕事着通勤をやめてお洒落な服に変化してきたという。

同じ現場へ通勤する女性たちというのはこれまたすべてがお洒落な私服になっている。これはどんな職場でもそうだが女性たちは何かとお洒落をする。そしてもし急にデートに誘われてもいいようにだ！。やっと現場の男もこのことに気がついたというより、元々、女性がないのが現場だからそういう文化というか遺伝子がなかった。それでも60歳以上の熟練工は、

「男の値打ちは仕事だ、その勲章でもある作業着を着て通勤、飲みに行くのがなぜ悪い？何が恥ずかしい」

と昼の休憩時間に演説をぶってはいたが、若い職人からは、

「おっちゃん、おっちゃん、そなんんいつていたら、子供に嫌われ、嫁はんには逃げられるで～」と相手にしなくなっていた。その、おっちゃんらも週末の職場の飲み会ではなんとなくこざっぱりした私服で来ていたから理絵の作戦はこれも大当たりしていた。

理絵がなぜ？現場男子のお洒落にこだわるかといえ、彼らは居酒屋、カラオケスナックなどに作業着を着ていくが、その制服の胸には「〇〇建設」「〇〇組」と書いてあるのでこれだけでガラの悪い印象を受ける。ただこれだけだけならいいが、やはり下品な言葉使いになるので余計

に社会的信用がなくなっていた。理絵も若いころはとび職の作業服を着た客が店に入ってきた瞬間に身構えた思い出がある。

だからといって私服なら下品にならないかというそうでもない。しかし、意識的にお洒落することを覚えるとこれが不思議に紳士になるということもある。だから現場男子は「男前」にならなければならないという持論だが、これには反論があるのは100も承知だった。

ある40代の職人がお洒落してスナックにいった。最近、職場で流行っているダンスの話などをおもしろくトークしていたときに、そのママさんから仕事を教えてほしいといわれて、

「私は〇〇建設の中村といいます」

「へえ～すごい～監督さんですか～」

「いえいえ、重機の運転もしますが、昔でいえば土方です」

「そんな～あんなといっっては失礼ですが、工事現場にこんな素敵な紳士がいたなんて...何かの理由で...」

「り、理由？理由なんてなく建設業が好きで...」

この中村はこんなエピソードを理絵社長に話をしている。さらに、理絵社長が勧めている現場合コンの意味がやっと分かってきた。現場に男の紳士が増えるとさらに女性が現場に進出してくる。そしてまた紳士が増える。この繰り返しで建設現場という過去の暗いイメージを払拭して明るい現場になるということが分かったという。理絵は、

「そう、10年前は女性専用のトイレも更衣室も休憩所もなかった。その当時の現場では喧嘩に昼休みのバクチと大荒れだった。現場で酒を飲み、飲酒運転も日常茶飯事。ダンプも20トン、30トンの過積載も当たり前。無保険のダンプが小学生の列に突っ込んで2人死亡させたり。給料日にはベンツに乗ったヤクザが借金の取立てに。今、こんな話はどこを探してもでてこない。現場に若い女性が進出してきたことで現場の男達もやっと社会的な紳士になったとこの中村に話をしていた。

「31話につづく）次回で1部完とします。そして2部につづく

この小説へのご意見、または要望は↓の掲示板に自由に書いてください。二つあります。

<http://9124.teacup.com/kyototaxi/bbs?>

<http://9124.teacup.com/kyototaxi/bbs/t2/l50>

2019年7月、東京オリンピック開幕まで後1年になった。京都からの先発組も3ヶ月になり一時帰宅、または交代の職人が京都に帰ってきた。鉄筋工、とび職、電気設備の職人らみんなの顔も東京の水が合ったのか？、なんとなく垢抜けをしていた。そのとび職の大森に理絵が東京はどうだったと聞くと、

「いや～理絵社長～現場の近くの居酒屋やスナックに行って京都から選手村の建設に来たというと...そら～京都というだけでモテた...そやさかいにこっちもさらにモテようと言葉使いもなるべく上品にしていた」

「そう、京都の建設業の株を上げてきたの？」

「はいな～秋になれば京都観光を案内すると約束してきた女性は5人もいる」

「あらら、それは大森さんだけなの？」

「いやいや、やっぱり応援だとか出稼ぎではなく、「施工、大栄建設京都営業所」の看板の重みがあるさかい、どいつもこいつも使ったことのない京都弁で紳士ぶっていたので、宿舎のアパホテルのフロントや朝晩食べるレストランの女性から最後の夜にお別れパーティーをしてくれた」

さらに大森は、

「京都のことが気になり田中建設のHPをみんな閲覧していた。合コンのことや「男前教室」などが参考になり、作業着と普段着しか東京に持っていかなかったから急遽デパートやメンズ専門店でみんなて誘い合ってお洒落なものを買った。そして、またそれを着て夜はなじみになった居酒屋、スナックで披露していた。そそ、それとダンス喫茶というのがあって初心者にダンスを教えている。ワシ、いやいや私も理絵社長...11枚綴りのチケットを買って覚えた。理絵社長、こんどの合コンには披露します」

「はいはい、私も喜んでダンスのお相手をしますのことよ～それにしてもすごいカルチャーショックを受けてきたのね」

「はい、東京の水で顔を洗ってきました。京都の現場男子もこうあるべきですね～理絵社長」

そしてその選手村建設の第2陣の職人が東京に送り込まれたが、この大森らの話を聞いていたのか2陣出発式の会場でもあった京都駅前の新都ホテルの会場の雰囲気は初陣とはうって変わってこれからロンドンにでも海外旅行するのかというほどお洒落な服装と大きなバックだった。その初陣組のときは約半数が洗濯はしてあったが、胸に〇〇建設と書いてある作業着だった。そしてその半分はジーンズで大きな紙袋に作業着をぶち込んでいた。中にはヘルメットを被ったまま新幹線に乗る職人もいた。

初陣のときはそれがそうおかしくはなかった。それはそれで～何も東京に遊びに行くのではないので男の勲章でもある現場の作業着を着て出発式、それに新幹線に乗っても誰にも文句はいわ

れない。また初陣のときに出席していた大栄建設の幹部もそれぞれ監督の作業着だった。またこれ取材する各マスコミもこれを気にせず現場とはこういうものだと思っていた。

しかし、理絵社長はそう思っていない。たとえば警察官に消防士も現場で作業をする。だからこそ作業着がある、作業をしないときの制服もある。そして式典などに着る服というのは豪華で立派な礼服になっている。ところが現場にはこの作業服しかない。これこそ職業差別で社会的地位が低い原因だと言い切っていた。

だからといって現場に豪華で立派な金モールの礼服は要求はしないが、こういうし出発式という式典には幹部である監督自らせめてスーツか礼服を着てほしいと妹の絵里菜の夫の菅原監督に要望していた。菅原監督も素直に、

「いや〜理絵ちゃん、俺も目からウロコが一枚落ちた！。たしかに俺もこの監督の作業着とヘルメットは男の勲章だと思っていた」

「そう、監督が変われば現場も変わる」

第2陣出発式は日曜日のために職人の家族、そして現場女子までもが多く参加している。来賓の京都府知事はモーニング、京都市長は和服、大栄建設の幹部はもちろん監督の制服ではなく礼服を着ている。京都営業ダンブ協会の会長、里井理絵ら3姉妹はきもの姿で華を添えていた。

この式典の主役である100名の職人もこの立派な出発式に感動していたが、考えれば初陣のときもこれとまったく同じだった。しかもまだ3ヶ月前の話でいったい何が変化したのかは分らなかった。理絵は職人を乗せた新幹線を見送りながら、

「また何人かの職人が東京の水で顔を洗って帰ってくる。その都度、その職人が「男前」になっていく」と思っていた。もし、これが当初の予定だった単なる数合わせの応援であったり出稼ぎだったらこうはならなかった。日給3万円もの高給をギャンブル、女遊び、そして現場男子の本性をむき出してやがて借金を抱えて帰ってくる職人も少なくはないだろう。京都人の古いプライドがいいとか、悪いとかは分からないが、今回は多くの職人が応援を拒否したことがきっかけだが、結果的にはそれが成功したと理絵は思っていた。

1部完...2部につづく

久々の長編小説をPCで書いたが、あんまり指を使い過ぎて右手の薬指が炎症の「バネ指」という病気にかかりました。このバネ指は薬指が自然にまっすぐにならず無理して指を曲げるとかなり痛い。治療はよく効く注射があるそうだが、これがまた特別痛い注射だそう。とりあえず1部をここで（完）として2部（32話から）は指の調子が良くなったら書きます。よくこの長編小説にここまで付き合っただき感謝とお礼を申し上げます。尚、この小説を紙の本にしたいだけの編集者、出版社を募集しています。

kyoyoinari@softbank.ne.jp